

---

# 虹の祓魔師

あかつきいろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虹の祓魔師

### 【NZコード】

N1746Z

### 【作者名】

あかつきいろ

### 【あらすじ】

祓魔師エクソシストが題材となっています。ぶっちゃけサブキャラの方が強いんじゃ?と思う方もいらっしゃるでしょうがそこはお見逃し下さい。?主人公は女性のほうですので。あしからず。

## プロローグ～始まりの日～

周りが燃えている様に赤い。周りには静寂が満ち溢れていた。

「お姉ちゃん、どこ？私を置いて行かないでよ。どこにいるの？お姉ちゃん」

そんな街中の公園で顔を伏せながら、泣いている少女がいた。すると近くの草むらから、女性が出てきた。

「鈴音～どこ～？」

「お姉ちゃん？どこに行つてたの？私、心配したんだからねー！？」

「あはははっ。心配性な妹ね。ちょっと知り合いで会つてただけよ。あ、そうだ。いい機会だから紹介しておきましょう」

そう言つて少女の姉は、草むらの向こうに手を振つた。すると、草むらから新しい人が現れた。少年だった。周りの暗さの所為で、顔は見えなかつたが。

「紹介するわ。彼は私の知り合いで 知つて言つたの。鈴音と  
ちょうど同年代だから、仲よくしてあげてね。それで 君。こいつ  
ちは私の妹で、星川鈴音って言つたの。よろしくしてあげてね」

名前の部分がちょうど聞こえなかつた。まるで上から封をされて  
いるみたい。

「よ、よろしくお願ひします」

少女は姉の足の後ろに隠れながら、挨拶をしていた。

すると、少女の姉と少年は笑い始めた。するとおりおもむと少女が慌て始めた。

「うわー、よひじべ。今度こひらの小学校に転校するんですけど、その時はよろしくお願ひしますね」

「う、うん。わからない事があつたら、何でも訊いてね」

「はー」

どもつている少女とは違い、少年ははつきりと答えていた。そんな二人の違いに少女の姉は爆笑していた。

「ちよ、ちよっとお姉ちゃん！ そんなに笑わなくたつていいじゃない！」

「だ、だつて鈴音、どもりすか。そんなに緊張しなくていいじゃな子じゃない、つて」

「あ～あ、言つちやつた。言わなこよつこ、してたつてのこ。俺は知らないよ、もう。それじゃ、俺はこの辺で失礼するよ。じゃあね」「はいはい、それじゃバイバイ。また明日ね」

「わ、わよくならー！」

どもりながらも、少女は手を振つて挨拶をした。

「はい、さよなら。星川わん」

少年も振り返り、手を振つて離れていった。

そして少女は姉と少し話をしながら、家に帰宅した。そして家族で談笑し、晩御飯を食べて、姉と一緒にお風呂に入つて寝た。

その日はすぐ眠れなかつた。少年の事を思い出して、テンションが上がつてた所為だ。突然、周りが真つ暗になつて、その闇から『声』が語りかけてきた。

『我が契約者よ。封印の猶予はもう間もなく終了する。その時こそ、汝と我的契約により定められた日覚めの時だ!』

そして少女は過去の眠りから解放される。

## プロローグ～始まりの日～（後書き）

自分が初めて書いた作品です。最初は学園編ですが、後からは学園編では無くなりまます。あしからず。

## 転入生

9月1日、二学期の始業式を迎えた今日私こと星川鈴音は、まだ続く猛暑に苦しみながらも私の机に集まっていた友人たちと喋っていた。

「ねえ、そういえば、鈴音知ってる? 今日うちのクラスに転入生が来るんだって」

「なにい、それは本当か? その転入生って女子なのか? 男子なのか? 教えてくれよ」

そう話しかけて来るのは私の親友の篠原棗である。その声に反応したのは坂田玲一君。

棗ちゃんはいつも元気いっぱいの女子だ。髪の色は金髪。黄、染めてるの? と訊いたらこれは地毛だと怒られた。容姿はモデル張りの体系をしている。趣味は女の子らしく買い物とか料理なんだけどね。

玲一君は、つていうか玲一君も元気すぎるくらいの男子だ。髪の色は茶髪がかつた赤色で、容姿は筋肉があるんだけど?????????引き締まったかんじな付き方をしている。まあ、それはどうでもいいんだけど。趣味は外見通り、筋トレとか言つていた気がする。

その会話にある男子が乱入してきた。

「男子みたいだよ。なんでもイタリアから來たらしいよ。日本人みたいだけど」

そう言つたのは進藤光一君。坂田くんの親友である。光一君の髪の色は銀で、特徴というと、いつも同年代とは思えない位に落ち着いている所かな? 趣味は読書。

「はあ？ 海外に居たのに日本人って????? 何かおかしくね？」  
「それ、私も思った。どうこう」と。

そう言つたのは、玲一君と棗ちゃんだつた。私も口には出さなかつたけど、不思議に思つた。そんな質問もわかつていたのか、余裕そうに光一君は答えた。

「ええつと、なんでもイタリア本部の方に留学してたらしいんだけど、前の学校を何か事情があつて通えなくなつたから。こっちに転入してきたんだつて」

「はあ～。その転入生もいろいろ大変だつたんだな」

「でも、うちの高校つて周りの高校に比べたら偏差値高いわよね。それにこの高校つて結構特異だし、その転入生君はそのところ大丈夫なのかな？」

「えつとね、大丈夫みたいだよ。何でもその転入生、偏差値70以上みたいだから」「70以上つて????????? その転入生、一体何者？」

これも、そう思つたが、やはり口には出さなかつた。

「まあ、転入生の話はここまでにして。なあなあ、昨日のあのドラマ見た？」

「食いついてきた割に引くの早いわね」

「えー。別に良いじやんか。興味無くなつちまつたんだから」

「ま、いいけどね。それでドラマの話だつて？ 見たけど、あれは？??????」「

もう他愛も無い話に変わつていた。そんな一風変わつたと所もこのクラスの特徴だ。

(転入生、か？？？？？。本当にどんな人なんだろう。)

始業式も滞り無く終わり、教室に戻っている時に棗ちゃんが話しかけてきた。

「いやー、もうすぐ転入生の姿を見れるね。ねえ、どんな人なのかな？」

「棗ちゃん、なんでそんな元気なの？」

「んんー？そういう鈴音はなんか眠そうだねえー」

「だつて、校長のどうでもいい話もそうだけど、元々この頃なんか寝不足だつたんだ。何か変な夢のせいで良く眠れなかつたんだ」

「変な夢？そんなもん見たの？まあ眠そうだな」とは思つてたけど私の言つた言葉に顔しかめながら、棗ちゃんは聞いてきた。

「そう。なんか、『もう田覚えの時だ』とか、何とか」

「ふーん。ま、そんな変な夢は転入生との出会いで吹き飛ばせー。」

「もう、気楽に言つてくれるなー」

でも、話をしたおかげで、ちょっと心がすつとしたのは言わないのでおく。言つたらまた調子にのりそつだから。

5分後、担任の先生が教室に入ってきた。ちなみに名前は風間真先生。

「ええー。2学期もまた、元気な皆の顔が見れて先生も嬉しい。さて、普通なら宿題の回収をする所なんだが。先にやらちゃいけないことがある。まあ知つてる者もいると思うが、このクラスに転入生が来ることになった。さて、入つてきなさい」

その言葉と共に、教室のドアが開いた。クラスの皆の視線は、扉に釘づけになつた。

扉が開いた先にいたのは、日本人と聞いていたに、髪の色は銀色だった。そして、手にレザーグローブを嵌めていたのと、腕輪をつけていた。それに、顔の方もモデルと同じぐらいで、身長の方は百七十センチぐらいあつた。

クラスの皆が唖然としている中で、転入生は自己紹介を始めだした。

「初めまして。今日このクラスに転入してきました、炎藤三剣です。これから色々とよろしくお願いします」

## 転人生（後書き）

同日投稿）。b やドラえもん。それではまた後ほど。

## 転入生との会話

当然だけど、転入生のあまりに日本人らしからぬ姿を見て、唖然としていたクラスメイトは答えられず、固まっていたのを見かねて先生が助け舟を出してくれた。

「炎藤への質問などは、休み時間などにしてくれ。あと、炎藤。君の席は星川の隣だから。ほら、あそこだ。星川、しばらく彼に教科書とかを見せてやつてくれ。転入生の紹介も終わつた事だし、宿題集めるぞー。早く用意しろ」

そこでクラスの皆も意識を取り戻した。「ええー面倒くせー」とか文句を言つてる人もいたけど、私はそれどころでは無かった。

転入生が自分の席の隣に来るというんだから。まったくシャレにならない。いや、シャレじゃないんだけども。

私は知り合いぐらいにもなれば大丈夫なんだけど、全然知らない人に話しかけるのは大の苦手だからだ。

そんな事を考へてみると、隣の席に座つた転入生の炎藤くんが話しかけてきた。

「ごめんね。これから色々お世話になると想つけど、よろしくお願ひしますね。ええーと、星川さん？」

「えつ、ああ、うん、よろしく。??????つてなんで私の名前を知ってるの？」

そんな私のまぬけな質問に、炎藤くんは苦笑しながら答えた。

「さつき、風間先生が仰つてたじやないですか。星川の隣な、って」「えつ？あ、そつか。そういうえば、そだつたね」

そんな事も忘れていた私は、なんとか笑つて」まかした。そんな下手な会話していた時に、ちょつとチャイムが鳴った。

「うわ、チャイム鳴つちまつたか。まあ、いいか。次の時間にホールームするから、誰も帰るなよ」

その言葉にクラスの皆は「ええー」と言つていたが、風間先生はそこらへんの対策も抜かりがなく、即座に炎藤くんを盾に使つていた。

「炎藤に聞きたいこととか色々あるだろ?」の休憩時間に色々聞いて。そんじや、次の時間までちゃんと待つとけよ~」

当然、炎藤くんが聞き逃すはずもなく

「ちょ、ちょっと、風間先生!俺を身代わりに使わないでくださいよー!」

そんな彼の苦情を先生は軽くスルーして、教室を出ていった。私はスルーされた事に落ち込んでいた炎藤君に、慰めの言葉をかけていた。

「まあまあ、風間先生はいつもあんな感じだから、気にしないでね?」

「あ、ああ。うん、大丈夫。気にしてくれてありがとう」

そんな事を笑顔で言つので、つい私は照れてしまった。

(でも、私的には先生に苦情を言つてた時みたいな、喋り方の方が

そんな事を考へてゐると、急に黙つた私を心配してくれたのか、炎藤君が喋りかけてくれた。

「ええっと、星川さん？大丈夫ですか？」

え、うん。大丈夫。心配しないで」

あまりにも早いスピードで言ったものだから、炎藤君はびっくりしていた。

「はあ、やうですか？？？？」

そんな事を喋つていると、チャイムが鳴つた。そこで、風間先生が戻ってきた。

「そんじや、ホームルーム再開するぞ。全員、席に着けー」

## ファミレスにて

その一十分後、やっとホームルームが終わった。風間先生が教室から出ていくと、みんなちりじりに動き出したのを確認すると、玲一君、光一君、棗ちゃんが私の席」と炎藤君に喋りかけていた。

「えっと、炎藤だつけ？俺はクラスメイトの坂田玲一だ。これからよろしく！」

「私は篠月棗。まあ、同じくクラスだから喋る機会も色々あるだろうけど、よろしくね。

あ、隣の子は自己紹介しないみたいだから、一応言つておくけど。隣の子は星川鈴音つて名前だから」

「遅ればせながら。僕の名前は進藤光一。これからよろしく」

そんな風に皆が自然に自己紹介をするので、炎藤君も呆然としていた。つていうか、棗ちゃん。さうっと私の自己紹介しないでよ。後でする気だつたのに。

「んー？だつて鈴音に任せてたら、すごい時間がかかるんだもん。それに、こっちの方が早いじゃん。違う？」

それはそうなんだけど????????普通、自分で言いたいと思うのが普通なんじゃないかな？  
つていうか、いつものことながら、何で私の考えている事がわかるんだろ？超能力？

「ふふん、鈴音の事なら大抵はお見通しよ」

「女子共の話合いはその辺にしどいて。この後、暇か？暇だつたら近くのファミレスで、お前さんの歓迎会をやりたいんだけどさ。

つて言つても、メンバーこれだけだけど

さすがに私も「」の発言にはびっくりした。

「え、何それ！あたし聞いてない！」

もうあたしが言つと、坂田君は「」いつ言つて返してきた。

「ふつ、当たり前だろ。ホームルームの時間にアイコンタクトで決  
まつたからな。  
つていうかわかつてたら、逆にこいつちがびっくりだわ。おまえは超  
能力者か？」

そんな事を話していると炎藤君が話に入ってきた。

「ええっと、坂田君に篠原さんと進藤君？別にこの後は暇だから別  
に構いませんけど、この学校は祓魔士エクソシストを育成するために作られて、  
そしてその能力を悪用しないように全寮制にして、門限もあるつ  
て聞いてますけど？」

そう。この学校の名前は国立祓魔士育成高等学校エクソシストといつ。目的は  
その名の通り。

この学校は確かに全寮制だが、守っていない生徒の方が圧倒的に  
多いのだ。

それじゃあなんでそんな高校ができるのかは？？？？？また  
後で説明しよう。

そんなことを考えていると、坂田君が説明していた。

「まあ確かにそなうなんだけど、でもほとんどの生徒は、守つてな  
いぞ。まあ、学生なんてまだまだ子供だからな。色々やりたい事が

あるんだよ、きっと

それを聞いて炎藤君は唖然としていたが、ほんの一瞬で平常を取り戻していた。ちょっと考えた後、私達に行く、と返事をした。その後に校門を出て、近くのファミレス『アスリカル』に到着した。そこでとりあえずドリンクバーを注文して、ひとまず席に着いた。話をしていく内に空気が和んだら、坂田君が炎藤君に質問した。

「そういえば、訊きたい事があるんだけど、いいか？」

「え、何？とりあえず、何でも訊いていいよ。答えられないのは、無理って言うから」

「わかった。じゃ質問なんだけど、お前って日本人なんだよな？」

「うん。そうだけど、それがどうかした？」

「じゃあさ、髪が何で銀髪なんだ？見たときから気になつてたんだけど」

皆、同じことを考えていた。どう見ても、染めてるようでは見えないし？？？？。

自分の髪を弄びながら、炎藤君は説明してくれた。

「あ、これ？俺はさ、父さんが日本人で、母さんはイタリア人なんだ。つまり、俺はハーフってこと。そんで、眼と肌は父さんから、髪は母さんが遺伝したってこと」

「へえ、そななんだ。つうか、ハーフって初めて見たよ」

その後、イタリアの話を訊かせて貰った。ゆるい雑談を始めて一十分後に突然、炎藤君と進藤君が立ち上がった。

不思議に思った坂田君が一人ともに聞いた。

「ど、どうした？突然立ち上がって。まだ門限まで時間あるけど？？？？」

そこまでしか聞こえなかつた。なぜなら？？？？？？？爆発音で  
遮られたからだ。

ドカアアアアアアーン！と、外から音が鳴り響いた。

## 悪魔との戦い（1）

それに遅れて悲鳴が外の音を満たした。その中に悪魔だ！悪魔が現れたぞ！と、叫んでいる人がいた。そんな声を聞いて固まつている私達に、炎藤君は怒声をぶつけてきた。

「何、固まつてんだ！動け！動いて一人でも多くの市民を救え！これは俺達、退魔士に課せられた義務だ！わかつたらとつとと動け！」  
「待てよーそういうお前はどこに行く気なんだよー一人だけ逃げる気が！」

「俺は?????元凶を断つ」

「はあ？お前?????自分の言つている事が、どんだけやばいが、分かってんのか！もしもその悪魔が集団で来てるんなら、トップは中級、上級悪魔だぞ！俺らに対応できるレベルじやない！個人で来てるなら下級レベルだけど。それだって一人じや倒しきれないと、教えられているじやないか！」

「じゃあお前は倒しきれないからつて諦めるのか？違うだろ！エクソシストならどうやつても死んでしまうような場面なら、より多くの一般人、或いは仲間を救つてから死ね！」

何もしないで死ぬなんて、そんなのはただの犬死だ！」

炎藤君はなおも何か言おうとしたが、時間の無駄と判断したのかすぐに店を出た。

ただ一言を言つて店を出て行つた。

「『めん。まだ見習いみたいなものなのに、言いすぎた。逃げるならせめて、先生達に連絡を入れてくれ。それじやあまた後で』

私達は約一分後に、玲一君の言葉で市民を助けるために動き出し

た。

その言葉はこうだった。

『おー、こんなで良いのかよ。あいつに？？？？？炎藤にだけ任せておいて。気に入らねえ。俺達でやるぜ。あいつを皆で見返してやるぜ！』

幸いにも、市民のほとんどはもう逃げ終わっていた。

だけど、反比例するぐらいに、悪魔がそこらじゅうにいた。そして、炎藤君を探し始めて5分後に、やっと炎藤君を見つけた。しかもその時、悪魔との戦闘中だった。戦闘は炎藤君の方が有利だった。そう判断したのは、5体ほどいた悪魔がずたばろで満身創痍という感じだったのに對して、炎藤君は刀を持って無傷で構えていたからだ。そして手の中の刀は、聖なる波道を放っていた。私達を横目で見て、私達に叫んでいた。

「何で来た！言つたら！先生達に連絡しろって！」

そんな事を叫んだ炎藤君にむかって、一いちも叫び返した。

「何よ！私達があなたの事を放つておける、とも思つてゐるの！？私達は？？？？？一緒に闘う仲間じゃない！」

一瞬、言葉に詰まつたが私は一体何を言おうとしていたのだろう？だがそんな事を考へるのは、後回しだ。見つめているとため息をついて、私達に言つた。

「わかつた！じゃあ、術式でのサポートを頼む！」

「了解！じゃあ、皆こぐみー！」

「了解！」「」

「我、放ちたるは全てを凍てつかせる氷の弾丸！『エクトブласт』！」

「来たれ！汝らはあらゆる物を貫く雷撃の槍なり！汝が刃を持つて我が敵を貫かん！」

『レイズエッジ！』

「大気に眠りし精霊達よ。汝らが光を持つて、我に仇名す敵を討て！」

「夜の闇に潜み、闇夜に名を連ねし精霊達よ。その闇を持つて我に仇名す敵を討て！」

玲一君と棗ちゃんが放つたのは天術で、私と光一君が放つたのは精霊術である。

何が違うのかと言わると説明が難しいんだけど、ぶっちゃけると天術は己の中にある天力を用いて放つ技。精霊術は異界にいる精靈の力を借りて放つ術なんだ。

天術は、自分の血の中にある天力を天術陣 通称、天陣とされる物に、注ぎ込んで放つ術。精霊術には術式がいらない代わりに、威力が低いんだ。

えつ？何でそんな物があるのかって？しうがない、説明しよう。天力は8年前の戦争の時に神様から与えられた力なんだ。

その戦争が何だったのかは、後々語る事になるだろう。

今は闘いに集中しようじゃない。私達が放つた術はそれぞれ悪魔に命中した。

元々傷ついていたせいか、悪魔達は攻撃が当たった瞬間、塵になつて消えた。

最後に残された悪魔は、炎藤君の刀に切られて、同じように塵になつて消えた。

炎藤君は刀を持って警戒を維持したまま、私達に話しかけてきた。

「君達?????何でまだここに残つてんの？俺は戻れって言つ

たよね、確か

その質問に答えたのは私だった。

「いや私達にも出来る事があるんじゃないかな、と思つてね」「俺の心臓に悪いからやめてくれ」

本当に顔を真っ青にしていたので、謝罪しておいた。  
そんなやり取りをしていると、凄まじい魔力の波動が流れてきた。  
その瞬間、私達の前方二二十メートルぐらいの場所に突然、悪魔が現れた。

「…………さつきから、配下達がやられてると思つたら、あなた達の仕業ですか？」

「そうだ、と答えたり…………ビリります。」

「決まります。死んでいただきます」

「だつてよ。…………なあ、お前が、この場所が気にいつてると思つないで。そもそも本気で戦うべきじゃないか?いいとこ見せつけいやうひげ」

そんな言葉を言つてこむ、炎藤君に返事したのは、驚く事に進藤君だった。

「そう…………ですね。『光』としての役割を、果たさないと  
いけませんよね」

「『光』?まさか貴様が『光龍王』だとこいつのか!?」

「そんな風に呼ばれるのも、いつ振りでしようねえ!」

「さあな、俺らをそんな風に呼ぶのは悪魔達だからな。  
いつもはこんな風に名乗らないんだけどな。今回は名乗らせてもらおう。

『彩炎の龍騎士』・炎藤三剣、推して参る」

「それじゃ俺も名乗ろうかな。…………『閃光の龍騎士』・進

藤光一、参ります

## 悪魔との戦い（一）（後書き）

この作品のヒクソシストは術式系と武術系の二つが存在します。主人公たちは両方とも使えますが、ちょっととしたチートみたいなものです。

それでは今日はこれまで。

## 悪魔との戦い（2）

そんな私達を、置いてけぼりにしてスケールの大きす過ぎる会話が行われていた。悪魔の方を見ると、歯軋りしながら叫んでいた。

「馬鹿な！こんな極東の地に『聖龍騎士団』<sup>セイリョウキシダン</sup>の団長が一人もいるだと！？そんな馬鹿な事が、あつてたまるものか！」

**聖龍騎士団**　　それは、イタリアのローマ法王庁にある騎士団である。その騎士団には合計で七つの部隊がある。

『炎』<sup>ファイア</sup>、『水』<sup>アクア</sup>、『氷』<sup>ギアッチャ</sup>、『雷』<sup>トゥオーノ</sup>、『風』<sup>ヴェント</sup>、『光』<sup>ルーチェ</sup>、『闇』<sup>ブレイオ</sup>この七つだ。

どの騎士団にも異能力者がいるらしい。そのため、競争率も凄いと訊いた事がある。

なんで騎士団の名前が属性の名前なのか。それはこの七つの騎士団の各師団長が、その属性の龍王と契約しているからだ。それは裏を返せば龍王達と契約さえすれば、師団長になれるっていうこと。だけど、龍王達にも好き嫌いぐらいはある。

だから龍王達と契約するためには、龍王達が出す試練をクリアしなくちゃいけない。つまり、今の師団長はそれぞれがトップ級のエリートなのだ。そんな強い人達のしかも、七人しかいない内の二人もいれば、それは確かに驚愕だろう。

つていうか、2人がそんなエリートだった事の方が、私達にとっては驚きだった。

だが一人はそんな驚きも見越していたのか、はたまた慣れきつて

いるのかは分からぬけど冷静に対処していた。

「残念だけど、これは事実。ま、自分の運のなさを呪うんだな。いくぞ『光』」

光一君は、炎藤君の言葉に頷いて、手を合わせながら祝詞を唱えていた

「わかりました。我が内の中に眠りし剣よ、今汝が姿を現せ。汝はかの英雄ランスロットが振るいし剣、汝が銘はアロンダイト…」

掌から出現した剣は西洋剣だつた。アロンダイト????????確か円卓の騎士団の一人、ランスロットが使つていた剣の名前だ。

「へえ。それ使うんだ。珍しいな。てつきり、オートクレールでも使うのかと」

「まあ、相手は上級悪魔っぽいですしね。尊厳を持つて戦つた方が良いでしょ？」

「俺は文句は言わん。ただ珍しいな、と思つただけだ。じゃ、やるか。俺は天術を使ってサポートにまわる。お前は剣で討て。いいな？」

「ええ、わかりました。あ、そうだ。玲一、ちょっと…」

戦い始める寸前に、光一君は玲一君を呼んだ。

「な、何だ？」

「彼女達の事、頼んだよ。あと、戦闘が始まつたら、この札を使つて結界を張つて隠れといて。わかつた？」

そう言って光一君は玲一君に4枚の札を渡していった。

「ああ、わかつた????死ぬなよ？」

「当たり前。つていうか、誰に向かって言つてんの。じゃあ、行つてくるよ、親友」

「おひ。頑張れよ」

そう言つて空中で拳をぶつけあつた。その時、炎藤君が光一君に喋りかけてきた。

「もういいか？そろそろ行くぜ」

「ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、出す」

「こつときまわ」

炎藤君が進藤君と、同時に行つてきた。いつ言われたら、言い返すことは決まつていてる。棗ちゃんと坂田君も、考えていた事は、一緒だつたよつなので一緒に言つた。

「「こつときまわしゃーー!」」「行つて来い!」

その言葉と共に、一人は駆け出した。

## 悪魔との戦い（3）

「人間風情が！たとえ聖龍騎士団の団長といえど、簡単に私を倒せるとでも思つてゐるのか！？なめるなよ！」

悪魔はそんな事を言いながら、魔術を使って攻撃してきた。

「あんたこそ、分かつてない。聖龍騎士団の団長って言うのはな？」

「？？？？」

「「一人ひとりが、魔王すらも倒せる実力を持つてゐるんだ（ですよ）！」」

だけど二人には魔術の余波すらもかすりはしなかった。

そして、さらに悪魔との距離を詰めた。そこで炎藤君は天陣を構築し始めていた。悪魔は十メートルに差し掛かつたところで、剣を出現させて近接戦闘になつた。悪魔と光一君は激突し、戦闘が始まつた。その戦闘は苛烈を極めた戦いになつた。

だけど、悪魔はすぐに競り負けた。進藤君の剣が速すぎたのだ。光一君の剣術は、神速といつても差支えないほどの速度だった。なにせ、剣の残像が攻撃のたびに、増えていくぐらいなのだから。

私と棗ちゃんには残光ぐらいしか見えなかつたが、玲二君には見えているらしい。光一君の連続攻撃を受けて、悪魔は膝をついた。悪魔が膝をついたので、戦闘は終わつたんだと思って、結界を解いたのがミスだつた。

その瞬間、悪魔は力を振り絞つて、私達に魔術を撃つてきた。異変に気付いた炎藤君が、助けに入つてくれた。天力で障壁を張つて魔術を受け止めていた。

だけど、その魔術は相当の威力があつた。炎藤君でも、そう簡単に消すことはできなかつた。炎藤君は数秒間、眼を閉じた。そして

次に眼を開くと、炎藤君の眼に六芒星が浮かんでいた。そして眼から術式が出てきた。

「その魔術に入介入、及び干渉。その後、魔術の破壊」

そう炎藤君が呟いた直後、術式から光が絡みつき魔術は消え去った。そして炎藤君は、構築していた天術陣の天術の文言を唱え始めた。

「其はあらゆる物を飲み込む、無限の焰なり。

其が焰を持つて、汝が炎を浴びし者を浄化せよ。

我が力の元、<sup>ペイルズ</sup>我が敵を討つ<sup>ペルティアン</sup>深淵の龍となり敵を飲み込め。

『炎獄の（・）絶焰』

炎藤君の出した炎は、龍の姿になつて悪魔を飲み込んだ。悪魔は防御壁を張つて防いでいたが、それも時間の問題だった。三段文言の天術なんて初めて見た。?????あんなすごい威力なんだ。私達学生が使えるランクは一段。有能な人でも一段。三段ともなると、頭が良い人が寝る間も惜しんで研究しないと使用できないレベルなんだ、と教えられた。

今の導師様は全員使えるらしいけど。三段文言を使える人は本当の天術使いなんだ、と風間先生は言っていた。おっと、それよりもちゃんと戦いを見ないと。悪魔は炎藤君の眼を見て、愕然とした顔を見せた。その後、炎に包まれながらもフツと納得したような顔をしながら、言った。

「君達はいつか後悔するだろ？。これだけは言つておこう。さて名残惜しいが、ここまでのようなだな。せめて名乗つてから去るとしますか。

紳士淑女の皆さん、私は最上級悪魔であり、インド系の魔王アスラ

に名を連ねる者。名はアガースラと申します。それでは、御機嫌よう

う」と、アガースラは塵になつて消え、悪魔達も去つて行つた。その後、炎藤君と進藤君は「明日会つたら、全部話すから」と言つて去つていったので、私達は何もできなかつた。

学園から先生たちが来て、私達に「後は先生たちがやっておくから、もう帰りなさい」と言つたので、私達は先生の言つた通り、寮に帰つてシャワーを浴びながら、今日の事を考えていた。転入生の登場。悪魔の襲来。

?????そして、その転入生と友達が実は聖龍騎士団の師団長だつた。

だけど、考えてみても何も分からなかつた。それが当たり前なんだろうな。そう納得して、考えるのをやめてすぐに寝た。その日に見た夢は、悲しかつたような気がする。

## 悪魔との戦い（3）（後書き）

試験終了直後の第一発です。それでは。

## EX・その日の夜

その夜の校舎の屋上では、こんなやり取りが行われていた。屋上に二つ、人影があつた。何か二人で話し合つていた。

「あ～あ、まさかこんな早くばれるとは思わなかつたな、拓也？」

今は誰もいないので、本名で呼び合つてゐる。俺の本名は金城炎真。あいつの本名は篠宮拓也。基本的に人のいる所では偽名で呼び合つが、人のいない所では本名で呼び合う事になつてゐる。

「この学校の唯一の同僚？？？？？いや、まだあいつがいるか。どうでもいいけど。とにかく、同僚に声をかけた。

「まあ、仕方ないないんぢやないですか？まさか、悪魔達にばれている、とは思いませんでしたが？？？？」

「こいつ、もしかして知らないのか？そう思つたので、言つてやつた。

「何だお前、まさかあの場所がばれていない、とでも思つてたのか？あそこはな、人間界はもちろん、天界・魔界にとつても、第一級指定地域なんだぞ？ばれてて当たり前だ」

まさか、そこまで分かつてないとは思わなかつたな。説明しなさ過ぎですよ、統帥。

案の定、拓也は驚いた声を上げていた

「ええええええええええっ！」

俺は耳をふたたながら言った。つむりこな、じこつ。迷惑だろ。

「あ、すこません。ちょっと驚いたから」

「お前それできょつとなのかな？」

拓也は間のわるそうな顔をしている。

「あ、あはは。『めぐ』、『めん』。まあ全ては明日からの行動次第だね」

「やつだな。全ては明日から、だな」

まあ、これからいろいろ忙しくなりそうなんだけどな。  
そんな会話に介入してくる声があった。拓也の契約獣 いや、  
契約龍である光龍王・ゼノリウスだ。

『貴様ら、そんなに楽観視していてよいのか?』

「ま、いいんじゃない? そんなに急かしたって変わることなんか何もないよ」

『しかし? ? ? ? ?一刻一刻と時間が迫っているのだろ?』

さらに会話に乱入していく声があつた。俺の契約龍である炎龍皇・  
レギエルだ。

お前ら、暇なのか? 一瞬そんな事を考えてしまった。

『まあまあ、その辺にしておけ。これから戦いに備えて休もう  
ぜ。相棒』

『レギエルー炎龍皇ともあつてがそんな態度で良いと思つている  
のか?』

事態は貴様が思つて居るよりも、もっと深刻な事なのだぞ!』

見ての通り？？？？いや、訊いての通りかな？光龍王は少々、神経質な性格をしている。ゆえに、説教をそれも人前であろうと余裕でするのだ。

『大体、貴様は昔からいつも？？？？？？』

これは長くなりそうだったので、さすがに止めた。

「止めとけ、ゼノリウス。今更どうこう言つたって、何も変わることはない。それよりも今、俺達がやるべき事は他の奴らが来るまで、ここに封印を持たせること、だろ？」

『確かにそれはそうだが？？？？？？』

この意見には、さすがの光龍王も文句も言わなかつた。そこで拓也が、上手く補佐してくれた。

「じゃあ、この辺でお開きにしましょうか。明日や今後の事も俺らは、やるべき事をするだけなんですから」

『そりそり、そんなに急かしたつていい事ないって』

そのやるべき事は大量にあるだろうけどな。

苦労症のゼノリウスは大変だな。さて、そろそろ終わりとするか。

「今日の集会は終わり。各自、今後に備えよ、つてことで終わり。我らが剣は弱き者のために、我らが命は大切な者達のために」

騎士団お決まりの言葉を口にして、集会は終わった。そう、俺の力は大切な人達のために使う。大切な人を守れるようになるために、俺は強くなつたんだ。もう？？？？？？あんな思いはしたくないから。とつと寮に戻るとするか。これから色々と楽しくなりそうだ

な。

『どうした、相棒？ 何か楽しそうだな』

「そうか？ ま、この学園は色々と面白そうだからな。仕方ないだろ  
？」

『ふーん。まあ別に構わんけどな。じゃ、お休み』

何だこいつ、珍しく淡白だな。まあ、いいや。色々考えていろいろ  
ちに、寮に到着した。そしてすぐに布団に入つて寝た。その日は久  
しぶりに昔の夢を見た。

## 説明の談話（1）

いつもより早く起きてしまった私は、いつもより早めに教室に行つた。どうという程の理由はないが、ただ部屋に居たくなかったのだ。

教室に着くと玲一君、棗ちゃんがいた。私が来た事に気づいて口々に挨拶をしてきた。

私も適当に挨拶をしかえした。すぐ後に、炎藤君と光一君が教室に入ってきた。

彼らの姿を見た途端、私を含めて皆、固まってしまった。

そんな私達を見て、炎藤君と光一君は、それぞれ苦笑いをしていた。

次に瞬間には、炎藤君は真面目な顔で私たちに話しかけてきた。

「皆、昨日は説明もせずに帰つてしまつて、悪かつたな。これから説明するよ、俺の?????いや、俺達の事を」

「別に無理に話す必要はないんだぜ？お前らの事を無理に聞くに気はないし?????」「

そこまでは玲一君は言えなかつた。何故なら、炎藤君が口を挟んだからだ。

「いや、やっぱり君たちには知つていてもらいたいから。まあ、君たちが何を言つても話すけどね、俺は」「つたく、横暴なやつだ。ま、別に嫌いじゃないけどな。そういうの」

「私も」

その返答を聞いた炎藤君はきょとんとしていたが、そこから一点の曇りのない笑顔を見せてくれた。光一君は何も変わらず微笑んでいた。半年とはいえ、ずっと一緒に行動していたからだと思つ。

「ありがとう。じゃあ、話すよ。俺達の事を」

その後に炎藤君が話した内容は??????はつきりいって、驚愕の内容だった。

## 説明の談話（2）

「無いとは思うけど、一応約束してくれ。これから話す内容は誰にも話さずに自分の胸の内にしまつといてくれ。いいな？俺達の任務はある重要地域の警護。正直俺は学ぶこと、つてないんだ。本部直属の学校を首席で卒業したから」

「ええええええ―――つ――」

「まあまあ、とりあえず落ち着いてくれ。話に戻るけど、俺達は祓魔士の総本山、イタリアのローマ法王庁に居たんだ。俺の階級は昨日あの悪魔？？？？？アガースラが言つていた通り。聖龍騎士団の第一師団長を務めてるんだ」

「ちなみに、俺は聖龍騎士団の第五師団長ね」

「そこで俺達はまあ、当然なんだけど。色んな悪魔、もしくは悪魔と契約した人？？？？？つまり、『契約者』とかと戦つてたんだ。8年前のあの戦争？？？？？そう、魔王率いる悪魔達が人間界に攻めてきたあの戦争。今も続いてるけど。俺はその当初から戦ってるんだ」

『契約者』<sup>アクヌス</sup>　それは、悪魔の所有する魔獸と契約をかわした人達の事を言う。

契約をかわした人間は、どんどん魔獸にその精神を蝕まれる。一週間経つ頃には、完全に精神を食われ、その魔獸が持つ破壊衝動のせいで暴れだす。そして目につく物や人、全てを破壊しようとする。そうなつてしまつたら最後、殺さなくてはならない。そういう人たちの事を言う。稀にその魔獸すらも飼い馴らす人がいるらしい。だけどそれだけじゃない。

聖獸と契約をかわして『契約者』になる人もいる。そういう人を

『天約者』、魔獣の方は『冥約者』と言ひりじい。ちなみに聖龍騎士団の団長達も『契約者』だ。

それよりも8年前の戦争だ。あの戦争のせいでの私は？？？？？！顔を下に向けていた私を見て、棗ちゃんが心配して話しかけてくれた。

「鈴音？大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だよ、棗ちゃん」

そんな私の気持ちを知つてか知らずか、炎藤君は話題を変えてくれた。

「おつと、ちょっと話がそれたな。それじゃ、あの時、俺が見せたこの眼の話をするんだけど、いいかな？」

私も含めて皆、一斉に頷いた。

「んじゃ、話すけど、この眼は天眼つて言つんだ。天眼つて言つのは、まあ一言でいえば特殊な力を持つた眼の事だ。

俺の天眼の名前は『アルミエス天魔のサイ』。この眼の能力は、人間が使う天術・精靈術。悪魔達が使う魔法・魔術の術式。そういうふた類の術式を読み取り、操ることが出来る力なんだ。

この眼のおかげで俺は今まで生き残つてこれたんだ。まあ、この眼のせいでいじめられたりしたことも、あつたんだけどな。

え？ その眼はいつから使えたかって？ 物ごころついの時から、そういう力があるのはわかつてた。初めて使ったのは?????五歳のころかな？

その時に俺もこの眼の事を、母さんに教えて貰つたんだ。何でも俺の『ご先祖様』が持つていた力は、遺伝で受け継がれていくらしい。まあ、他にも天眼保持者はいっぱい居るんだけどな。種類は?????

？？？さすがに多いから全部は把握してないけど。

一応言つておくけど、世界には他にも魔眼保持者、或いは神眼保持者が存在するんだからな。俺は恵まれてる方なんだから感謝してるんだ。これでもな。

そんな悲しそう顔すんなって。俺ら保持者達は別に、そんなに困つてるわけじゃないんだ。

そういうや昨日、遺伝の話をしたけどな。あれ、嘘だから。この髪の毛は染めてるだけ。俺が母さんから遺伝したのは、眼の力と才能だけなんだ。悪いな、嘘ついちまつて」

そこに唐突に話に割り込む声が出た。その人は気配もなく話に入つて来た。

「まあそんな生活を十年以上も送つてゐんだから慣れもしますよね、  
師匠」

「まあその通りなんだがな。つていうか、人が話してゐる時に割り込んでくんな。

前から言つてんどう?はあ、弟子なんかにするんじゃなかつた」

炎藤君がため息をついていた。だがこひらとしては、全く分から  
ない。

「どこから声がしてゐんだろう?そんな思いが湧いてきた。

「いやいや、ちょっと待て。さつきから声がするが、どつかり聞こ  
えてんだ?」「えつ?君たちの後ろだけ?ほら、そこ」

「え?え?え?え?え?つわああああー!」「

## 説明の談話（3）

「そんなに驚かなくてもいいじゃんかよー」

「そう言つたのは、学年の剣術学科でトップクラスの成績を持つ、  
かりのかける  
狩野駆君だ。

狩野君の髪の色は金髪で、容姿はモデルが顔負けしてしまうレベル。ファンクラブも出来上がりしている程、人気があるんだ。

何故、彼がここに？

「お前が限界まで気配を断つてゐるからだろ？人に喋りかける時はその状態やめる」

「師匠がやつとけつて言つたくせに？？？？？あだつ！」

狩野君がぶつぶつと文句を言つてゐると、炎藤君に頭を殴られていた。うわ、痛そう。

「何、ぶつぶつ言つてんだ。うるさいぞ」

「ちょ、ちょつと待つてくれ。なんで狩野の事を、お前が知つてんだよ！？」

「ああー、そつか、言つてなかつたつけ。こいつ、俺の弟子なんだ。まあ階級と流派は秘密だけどな」

「「「ハア？」」

「ちよつと待て。え、じゃあ何か。そいつは????????狩野はお前の弟子で、もう現場で戦つてるエクソシストだつて言つのか？」

「「「うん」」

「なんじゅやんじゅ？？？？」

「ええと、なんか落ち込んでるといつ懸け合ひ、話を続けても良いか？」

「いいよ、わい。何でもどんと来い。つて感じだよ、わい」「ありがとう。つても、もう話す事一つしかないんだよね」

「あの事ですか？師匠」

「やつ、その事だよ」

「えつ、どの事？」

私の疑問の声はあいつ無視された????????うよつと悲しき。

「あのや、皆に頼みがあるんだ。多分一学期中に小隊を組むことになるとと思つんだ。」

その時に俺とこいつと君たちで小隊を組みたいんだ。ビーハーのお願い聞いてくれる？」

セイは玲一君が即座に返答した。答えは即答だった。

「いいぜ。事情を知つてるもん同士の方が、氣も楽だからな。お前らも良こだろ？」

「「もちろん、賛成」」

その答えの出すあまりの速さに、炎藤君も狩野君も驚いていた。さすがに、長い付き合いをしている光一君は、驚かなかつたが。

「え、ちょっと皆そんな簡単に答えだしちゃつていいの？そりゃ頼んだのは俺たちだけだ。もつと考えても良いんだぜ？」

「いじつてこいつの話は早めに答えた方が気が楽だし。気にすんなつて、俺らはこれで良いつて言つてんだからさ。それよりも、

「これからよろしくな  
へ」ああ、よろしく

遠藤君は微笑みながら握手した。そのすぐ後に、他の生徒が来たのでちょっとよかつた。

## 第十三番小隊VS炎藤（1）

朝のHRの時間に緊急全校集会が行われた。

内容は当然というか、皆知っていたけど昨日の悪魔襲来事件の発表だった。教室に戻った後、風間先生から今日から一週間以内に小隊を作るよう言われた。

昨日の事件のせいで今日の授業は無くなり、小隊を組む事になった。もう決めてあつた私達はすぐに申請して、第二十七番小隊のバッジを貰った。

ちなみに隊長は私。話し合いでそう決まった。隊長は誰がやるのかと話し合いになつた時、光一君と炎藤君は私を指名してきた。当たり前だけど、私は理由を訊いた。一人が言つには

『俺と光一はやるわけにはいかない。俺らはここにいりとばれるたらまずいからな。で、残るは四人になつた訳だけど、狩野じゆのはダメ。こいつにはそういうの全然教えてないし、素質がないから。

三人の中から選ぶとしたら、俺は君を選びたいんだ。何故なら、多分君には統率力がある。もし光一の報告通りなら、大抵の事は出来るよ。というわけで俺の理由は以上。お前はなんかあるか、光一？』  
『同意見ですよ。補足するなら、星川さんってそういうタイプの気質なんですよ。だから大丈夫だつて』

そう言われては文句のしようもないでしぶしぶ承諾した。

申請を済ませた後、技術の向上と、私達の技術チェックをかねて、特別演習場で戦闘技術の練習をしようと、炎藤君が言つたので、皆で特別演習場に行つた。そこには数名の先輩たちが戦闘訓練をしていた。

私達に気がついたのか、その先輩の一人が私達に話しかけてきた。  
一応、私が対応した。

「何だお前ら。新しくできた小隊なのか？そりゃないなら、とつ

とと帰れよ。流れ弾に当たつて怪我したくなかったらな」

「はい、新設したばかりの部隊です。先輩たちは何番小隊の方々ですか？」

「俺達は第十二番小隊。お前らもここに戦闘訓練にきたのか？」

「はい。先輩たちもそなんでしょう？」

「ああ。昨日の戦闘では、活躍できなかつたからな。もし、今度昨日みたいな戦闘が起これば活躍したいからな。そうだ。お前ら、俺らとちよつと模擬戦やろうぜ」

先輩がそう言つた瞬間に玲一君と炎藤君が会話に参加した。

「えつ、ちよつと先輩、何言つてるんですか。俺らみたいな出来たばつかの弱い小隊相手にしても意味ないでしょ？」

「坂田君、この人たちの相手は俺がしどくからせ。先に準備運動をしといてよ」

「ほう、言つてくれるじゃないか一年風情が。いいぜ、要望通りぼじぱーにしてやるよ。ちよつとこっち来いよ」

「ええ、結構ですよ。じゃ行つてくるよ」

## 第十三番小隊VS炎藤（2）

「じゃあルールを決めるぜ。1対5のバトル、武器は素手のみ。ただし天術は使っても良い。まあこんなもんか。そつちもこのルールで良いか？」

「ええ。じゃ始めましょつか」

「ああ、そうだな？？？？？いくぜー我、放ちたるは雷の矢！」『ジールエクス！』

「雷の矢できますか？？？？？ならー全てを燃し尽す炎の弾丸よ！今、汝が力を持つてあらゆる物を灰塵とかさん！『バーンマグナス！』」

炎藤君が描いた天術陣から炎の弾が射出された。先輩が放った雷の矢と、炎藤君の炎の弾丸が激突した。破られるかと思つたら、一瞬で炎藤君の弾丸が雷の矢を相殺し爆発した。

「ほつ、なかなかやるじゃないか。」

「先輩こそ。一段文言のしかも初級天術なのに、なかなかの威力があるじゃないですか」

「ふつ、お褒めいただきどうも。だがお前忘れてるのか？これは個人戦じゃなくて集団戦なんだぜ？」

先輩がそう言つた瞬間、煙の中からあと4人の先輩が出てきた。その先輩たちを見ても驚かずに、炎藤君は対応していた。

「もちろん忘れてません、よつとー。」

炎藤君は最初に向かつてきた、先輩の顎先に掌底を食らわせ氣絶

させた後、次に向かつてきた人の首筋に手刀を食らわせ、これも同じく気絶させた。他の2人は鳩尾を殴り、同じ様に気絶させた。

「へえ。三年を4人も倒す、しかも気絶させるとはすごいな」

「つていう割には結構余裕ですね、先輩。まあ、いいや。そんな先輩に敬意を表して俺の流派の奥義をお見せします」

「そりやあ楽しみだな。こい！」

その時炎藤君は、世界のリズムに同調するように、自然に走り始めた。そんな炎藤君を見ながら玲一君は驚愕の顔をしながら言った。

炎藤君が自然に走り始めた。あまりに自然すぎて誰も反応する事が出来ないくらいだった。先輩ですらも反応できなかつた。

「行きますよ、先輩。奥義！ 神龍炎舞！」  
〔エンシヨウザンスエイジ〕

唖然としていた先輩のもとにたどり着いた炎藤君は、手首から天陣を出現させた。

次の瞬間、炎藤君は天力を使って手に炎を宿し、舞うように攻撃し始めた。二十発位食らったところで、やつと先輩は倒れた。

「ははは、なんだそりや。強すぎだろ？」

「はあはあ？？？？？？？？？？？？？？？？？？？」

神龍炎舞を二十発も食らって、立つてられたのは、先輩を含めて十人もいませんから

「へへ、そりや光榮だな。あと俺の名前は田島信一ってんだ。これからよろしく頼むぜ？後輩」

「俺の名前は後輩じゃなくて、炎藤三剣です。こちらこそ。これら色々とよろしくお願ひします」

「わかつた。さつく悪いんだけど身体起こすの、ちょっと手伝つ

てくんねえ？」

「ああ、いいですよ。よつと」

炎藤君は先輩、いや田島先輩に手を差し伸ばしていた。

「よいしょっと。ふー、サンキュー。じゃあもう行つていいぜ。絡んで悪かつたな」

「いえいえ。気にしてないんじ、別にかまこませんよ。それでは、失礼します」

「ああ、じゃあな」

そして炎藤君が一いつ瞬間に戻ってきた。

「さて、じゃあ戦闘訓練を始めようか。って、あれ? どうしたの、皆?」

「いやいや、どうしたのって師匠。それはちょっと彼らには、酷ですよ」

「あん? 何でだよ。って????? ああそつか。皆は俺の戦つてる時の姿つて、見たことないもんな。悪かった」

「いや、別に気にする必要はないけどさ。????? お前、本当に強いんだなって思つてな」

「まあ、そりや当然だよ。なんせ、師匠は導師????? むが!」

炎藤君は唐突に、狩野君の口を抑えていた。炎藤君は一体何をしてるんだろう? と不思議がついたら炎藤君が狩野君に、小声で喋りかけていた。

「お前、今何を言おうとしていた? っていうか、それ以上言ついたらどうなるか????? わざわざ説明するまでもないよな?」

炎藤君が狩野君に、何かを小声で言つていたようだ。まあ何を言つていいのかは、わからなかつたけど。

分かるのは狩野君が炎藤君に脅されていたということだ。何故わかるのか、簡単なことだ。????? 木場君の顔が、大量に汗を流していたからだ。玲一君が見かねて、炎藤君と狩野君を呼んだ。

「おーい。俺らを無視しないでくれよ。とつと修練を始めよつぜ」

「あ、ああ。わりい、わりい。じゃあ修練を始めよつか。そんじや、最初は俺とのバトルつてことで」

炎藤君は手の骨をポキポキと鳴らしていた。口からはそれどじゅ  
じゃなかつた。

「ちょっと待つてよ！実践慣れしてた先輩が負けてたのに、そうじ  
やない私たちが勝てるわけないじゃん！」

その私の抗議は炎藤君には全く意味がなかつた

「ハツハツハ。大丈夫、大丈夫。1割ぐらいの力で闘うからさ」「1割？それって先輩達との闘いに比べるとどれくらいなの？」  
「うーんと、同じぐらいかな？さて、始めるよ。我、求むるは？  
????？」  
「わあ、ちょ、ちょっと待つてばあ…」

20分後、予想通り私達は地面に伏していた。

?????不思議な事に光一君と狩野君は特に疲れていなそう  
だつた。

まあ、当たり前か。二人とも、本職なんだし。  
でもこんなとこじや止まれない。私にはしなくちゃいけない事が  
あるんだから。そのために、強くなるつて決めたんだ。

気持ちは気合十分でも、身体は全然ついてこないから、今はどう  
しようもないんだけど。だけど、そんな惨状だった私達を、炎藤君  
は褒めてくれた。

「いやあ、驚いた。中々耐えたじゃないか。凄い、凄い」

その言葉を訊いた玲一君は、拍手している炎藤君を見ながら言つ  
た。

「はあ、はあ。凄いって？田島先輩よりも短かつたじゃん。なのに

「何で？」

「いやいや、3年間もやつてゐる先輩達と自分達を比べるとか、ちょっとおこがましいよね。

それに先輩達とやつたのは模擬戦であつて、訓練じゃないからね。君達と先輩達は修練の量もそうだけど、経験の量が違うんだからな。それに、あの先輩は結構才能がある。あの人はおそらく『称号持ち』だろうね。まあ、どうでもいいんだけど。むしろ、現段階でこんなだけ耐えられた君達の方が、俺にとつては驚きだよ」

誉められてゐるのに、実感がわかないとは不思議なものだ。

「初めてこの修練をやつたつて言ひのこ、ここまで耐えられるなんてすごいよ。ねえ？」

「そりそり、本部の退魔士でも十分持つか持たないか、つてぐらりなんだから」

光一君と狩野君も、そう褒めてくれた。そう言われると、誇つても良いんだなと思えてくる。

「わつそつ、誇つてればいいんだよ」

炎藤君に心を読まれた。まだ会つて間もないのに、何で？

「なんでかつて？そりや、顔に出やすいからだよ」

苦笑されながら、そう言われた。むむむ、そつかなあ。私が顔を触っていたのが、面白かったのか。皆、笑い始めた。

「ええ、ちゅうと、皆ひどいよ」

そう言つても誰も笑うのをやめなかつた。玲一君なんて酷いものだ。お腹を抱えて、ひいひい言つていたのだから。

炎藤君と狩野君、棗ちゃん、光一君と玲一君も笑つていた。それを見ると、怒つてゐるこっちが馬鹿らしくなつてきた。

ズキンッ！

唐突に頭に痛みが走つた。私、炎藤君の笑顔????????見た事がある？

ううん、そんな筈ない。なにしろ彼に会つたのは、昨日が初めてなのだから。じゃあなんで何だろう。頭の痛みが酷くなつてきた。これ以上は、もうさすがに????????無理。

頭を押させていた、私を不審に思つたのか、炎藤君を先頭に皆が寄つてきた。それを確認したすぐ後に、私は気を失つた。

最後に見たのは、炎藤君の深刻そうな顔だった。

## EX・保健室にて

星川さんが氣絶した後、すぐに保健室に彼女を連れていった。保健医である、雛森先生は「特に問題はないみたいね。ここは大丈夫だから、あなた達は寮に戻りなさい。ちょっと埃っぽいわよ」と苦笑しながら言った。

退出しようとした、「ああ、炎藤君。あなたは少し待って頂戴」と声をかけられた。

「はあ、わかりました。皆、今回の訓練は終わり。各自、自主練なり、休むなり好きにして。じゃあ解散！」

雛森先生は、皆が退出したのを確認した後、俺に話かけてきた。

「「」みんなさいね。ちょっとあなたに伝えたい事があるのよ」

次の瞬間、雛森先生の口調と視線が変わった。

「炎龍皇様、お待ちしておりました。現地協力員の雛森楓ひなもとかえでです」

だと思った。やっぱりこの人か。

「どうも。一応初めまして、ですね。彩炎の龍騎士、炎藤三 剣です。あなたの事は、本部で秘書から訊きました。何でも、今まで結構の数の任務をこなして、しかもその任務のほとんどを成功。失敗した数は一桁台とか」

「炎龍皇様に覚えていただけるなんて、身に余る栄光です」

「昨日の内に訪ねたかったんですけど?????すみませんでし

た。もう悪魔が襲撃してくるとは?????予想外とはいえないですよね?」「

「一応その心配はないでしょう。緘口令を敷くのに炎龍皇様の名前を使わせていただきました。申し訳ありません」

「いえ、それくらいなら大丈夫です。君?????いえ、あなたを含めて協力員は何人いるんですか?」

「そうですね?????そんなに多くないです。昨日の戦いのせいで、負傷した者が十人位ですので残り十人程度といった所、でしょうか。あと、別に君でもかまいませんよ?」

「そうですか?????それでは、普段通りの行動をしながら、情報を収集、及び俺に報告して下さい。あ、そうだ。何か必要な物資はありますか?あるならそれも報告して下さい。いいですね?」「はい、わかりました」

う、ううう。その時、星川さんの呻き声が聞こえてきた。雛森先生は、即座に星川さんに駆け寄った。

「星川さん? 大丈夫? 気分悪かつたりしない?」

「あ、雛森先生。大丈夫です。あれ、炎藤君」

「あなたに付き添ってくれてたのよ。良かつたわね、どうせなら付き合っちゃえば?」

星川さんは顔を真っ赤にしながら、怒っていた。

「せ、先生、何言つてるんですか。そんな訳ないじゃありませんか。ねえ、炎藤君」

そんな彼女が可愛くて、いたずらをしてみたくなった。

「ああねえ、俺は別にかまわないけど？」

「うーん」と、彼女の顔はもつと赤くなつた。

「この辺にしどくか。行きたい所もあるし。

「じゃあ、離森先生、星川さん。俺はこれで」

「うーん。また明日」

「はー、わよなら。あんまり無理しないようにな

出る時に小声で「じゃあ、あの件よりしじめ頼みますよ」と伝えて退出したあと、振りかえつて言つた。

「みんな。鈴音。と小声で言つて目的の物がある場所に向かつた。

## 保健室にて

「え？」

炎藤君が保健室を出ていった時、扉の向こうから声が聞こえた。

今、炎藤君確かに、私の名前を呼んだ。教えてないはずなのに。私はこう見えて聴力と視力が良いのだ。皆には、内緒にしてるけど。明日会った時、訊いてみよう。

「ところで、急に倒れたらしいけど、何があったの？」

雛森先生がいきなり質問してきた。

「?????なんとかわからないんですけど、炎藤君の笑つてた顔を見た時に、思つたんです。私はどこかで彼の顔を見た事がある、つて。でも、そんなことないはずなんです。??????だつて彼は昨日転入してきてそこで知り合つたばかりなんですから。その後、なんとか分からんんですけど、頭が痛くなってきたんですよ。あはは、おかしいですよね」

雛森先生はちょっとと考えた後、私の目を見ていった。

「ねえ星川さん。あなたは彼の役職を知つてるかしら？」  
「先生は知つてるんですか？」

内心は驚いていた。彼が、聖龍騎士団の師団長である事を知っている人は、少ないはずだ。じゃないと、彼の事は学校中で有名になつてはいるはずだから。そんな私の質問に、先生はあっさりと答えた。

「そんな質問をする、つてことは知っているのね。彼の役職は聖龍騎士団の第一師団長であり、世界に五人しかいない導師様の一人よ」

導師？先生、今確かに導師って言つた。確かに言つた。

導師　それは普通の祓魔士の少なくとも、二十倍以上の天力を持つ者に与えられる称号だ。だが、そんなに天力を持っている人は稀少だ。故に、世界に五人程度しかいない人達なんだ。

ちなみに、エクソシストは最低でも一般人の三倍の天力を有している。

炎藤君は師団長と導師の両方を兼任してゐるっていうの？

驚いていた私を見て、言つた雛森先生の方が驚いていた。

「あれ、炎龍皇様から訊いていない？参つたなあ。どうしょ

「ちょっと待つて下さい。先生、炎藤君は導師も兼任しているんですか？」

「その口振りだと?????彼が炎龍皇だという事は知っているみたいね。彼はね、まだ若干十六歳なのに沢山の一ツ名を持つてゐるの。まあ、彼はあの戦争を生きぬくような凄い人なんだけどね。それは置いといて?????その一つにね、鎖・十字架カーテナ クローチエというのがあるの。その二つの由来はね、あらゆる物を拘束できる力を持つてゐるから、なんだつて」

「いえ、知りませんけど????それがどうかしたんですか？」

何でそんな事を私に言つんだろうか？雛森先生は何を言いたいんだろうか？

「何でもね。その力は応用次第で、あらゆる物を封じることもできるんですって。

それこそ、人の記憶だろうとなんでもね。でも一般の隊員で、その

能力を見た事がある人はいないから、確証はないんだけど?????

??

何だつて！？もしもそれが本当なら????私は昔、彼と会つた事があると思つた事の証明にもなる。

「間違つてたら、『めんなさいね。でも、そういう可能性がある事も忘れないでね』

離森先生がそう言つてゐるのを聞きながら、私は色々考えてみたが分からぬ。

その事も明日、彼に訊いてみよう。と考えながら私は保健室を退室した。

わからない　　その事が今一番怖い。誰よりも何かを知りたいとは言わない。

ただ、それでも自分の事で分からぬ事があるのが怖い。

そう思つた瞬間、私は走り始めていた。どこにいるかなんてわからぬ。それでも私には確信があつた。

目指すは炎藤君の居るであろう場所??????演習場だ。

## EX・模擬戦

保健室を退出して、目的の場所に向かってから十分後、俺は演習場に戻っていた。そこには、予想通り拓也がいた。

まあ、そうだろうな。お前は、いると思ったよ。

「予想通りって顔してますね。まあ、当然でしょうね。あんなんは

俺らにとつて、準備運動に近いんですからねえ」

「さて、じゃあ俺ら流の修練を始めるとするか」

「そうですね。じゃ、ルールどうします?」

「そうだな?????じゃあ、無手の近接戦闘にするか。天術込みだと、さすがに俺に分があるからな」

「そうですね。あなただけでしようから。聖龍騎士団の師団長と、導師の兼任なんて無茶な事をしているのは」

「あんまりでかい声で言つたな。ばれたら面倒なんだから」

俺の数ある一つのやつもそうだけど、な。

そのころ雛森先生が鈴音に話しているとは、彼は夢にも思つていなかつたが。

「このコインが地面に落ちたら試合開始だ。いいな? つておくれど、地面に倒れた方が負けだから」

「分かつてますよ。いつもどおりじゃないですか」

「一応な。じゃあ、いくぜ」

「コインを上に弾いた。俺達は一人同時に構えた。

キンッ。地面にコインが落ちた

拳、蹴り、肘、膝、攻撃できるものなら何でも使い、相手にダメージを与える。それが俺ら師団長、いや騎士団にいる騎士達の戦い

方。

騎士たるもの、たとえ血まみれになろうとも、傷だらけになろうとも強くあれ。

指一本でも動くのなら。力なき民を守るために、戦え。そのためには？？？？強くあれ。

それが、騎士団の皆が力のない人達を救うために決めた使命だ。

「奥義、天神爪牙に連結、天神乱舞！」

「千天斬光流、奥義、光天驟雨に連結、天地斬光撃！」

拓也は千天斬光流。俺は神影無双流。俺達に限らず、各属性の魔王たちは自分の流派を持つている。

そしてその流派には、各属性の名前が入っている。各師団長は自分が流派を持つことを義務づけられているのだから。

だけど俺はその当時すでに流派を持っていた。俺の流派はその歴史と使命上、名前を変えるわけにはいかない。そのため、俺は統帥に頼みこんで、なんとか特例として、認めて貰った。だが俺の流派を継げた者は数少ない。

約七師団、総勢一万六千人の団員の中でも三十人だけだ。その全員、騎士団の中でも上の位にいるけど。副団長とか、その他色々。そんな周囲から見たら、過激な戦闘を？？？？俺達からすれば普段通りの修練を、十分ほど続けていたら拓也が体力切れで倒れた。まったく情けないな。さすがに無理を言いすぎてるかな？

「はあ、はあ？？？？？疲れた。ちょっとは、手加減して下さいよ？」

「しててるっての。これでも五割ぐらいしか、力を使つてないんだぜ？」

「ええ～。どう見てもそつは見えないんですが。つていうか、それ『雷』との模擬戦と何が違うんですか？」

「雷<sup>ライ</sup>との模擬戦は八割ぐらいだから、まあそれよりは弱いってことだ」

「信じられないんですけど。あれで五割つてところが」

「お前はちょっと戦線を抜けて長いからな。仕方ないし、むしろここまで出来た事を誇れよ。なかなかやるようになつたじやん。戦闘力もなかなか上がってきたようだしな。ま、次、頑張れよ」

その言葉に拓也は苦笑しながら返事をした。とはいっても最近は皆実力を上げているから手放しに讃めることはできないんだけど、な。

「そうですかねえ????。あんまりそんな感じしないんですけどね」

「まあ、そんなもんだろ。仕方ねえよ」

そんな会話をしている俺達のところに思わず人物が現れた。  
?????星川さんだ。彼女が何故、こんなところに?

「あれ、星川さん。どうしたの?っていうか、身体、大丈夫?」「ありがとうございます、光一君。大丈夫だよ。それよりも炎藤君。ちょっと用事があるんだけど?????いいかな?」

「用事?また、今度にすればいいのにそんな急がなければならぬ用事つて?」

そんな疑問を抱いていた俺に向かって喋りかけた。

「いいけど?何を訊きたいの?」

「ねえ、炎藤君。私と(・)あなた(・・・)つて(・・)同じ(・・)か(・)で(・)会つた(・・・)事ある(・・)?」

ツーどうして、今の彼女がそんな事を口にするんだ!?

まさか?????もう解けたつて言うのか?いや、そんなはずはない。そんな感触はなかつた。ならば、なぜだ?

そんなふうに考えている俺を不審に思つたんだろう。星川さんは

もう一度強く俺の名前を呼んだ。

「炎藤君…どうなの？本当なの？ねえ、教えてよ…」

「……………どうして、そんな事を訊くの？って、どうか誰がそんな事を言つたんだ？」

何とかそれだけを口にする事はできた。セヒの後ビリキ。

星川さんは律儀に答えてくれた。

「離森先生が言つてたの。あなたが導師でもあるって教えてくれたよ」

「あの人か！はあ、？？余計な事をしてくれたもんだな。まったく  
く  
「で、ビリなの？本当なの？」

わからない、とこりどが怖いんだろう。そりやそりだ。  
自分の事が突然、分からなくなつてしまつたんだ。無理もない。  
だけど、この（・・）こと（・・）だけは（・・）、話すわけ  
にはいかないんだ。

「「めんな、星川さん。この事だけは話す訳にはいかないんだ。いや、いつか話す事になるんだろうけど。今は？？？？無理なんだ。もう一回言つたゞ、本当に「めん…」

その返答は俺の予想以上にあつけなかつた。あまりにあつけなさ過ぎて、逆にこいつちが拍子抜けしてしまつた。

## 話の終わり

「うん、わかった。いいよ」

「え？ いいの？」

俺はその答えに睡然としていた。

「うん。だつて、いつか話してくれるんでしょ？ それなら別に良いよ。私の名前を知ってるのもそつなんでしょう？」

「え、うん。そうだけど。ひょっとして？？？？ 聞こえてた？」

恥を忍んでの質問はあっさりと首肯されてしまった。

「扉を挟んでたんだよ？ それなのに、なんで？」

「私、視力と聴力が良いから。私の得手は銃だもん。狙撃銃、拳銃、機関銃。何でもござれ、って感じだから」

「ああ、そうなんだ。なあ、光一は知つてたのか？」

「まあ、そこそこは知つてましたけど。おっと、失礼」

唐突に光一君の携帯が鳴り始めた。あれ、語る人が変わつてない？ まあ、いいや。

光一君の携帯に来たのは電話じゃなくて、メールだつたようだ。結構長かつたらしく、読むのに三、四分ほど掛かっていた。光一君は読むのが凄まじく早い。

昔、光一君が読みたがっていた本をたまたま私が持つてたから、貸してあげたら一時間ちょっとで返しに来たのだ。四百五十ページ近くあつた本を、だ。しかも内容を全部理解していた。

メールを読み終わつた光一君に、炎藤君が訊いていた。

「で、内容は？もしかして？？？小隊戦の日程が決まつたのか？」

を今まで組んでいたらしいです。

反省文十五枚って？？？そんなのやつてたら日が暮れちゃうじゃん。そんのはごめんだよ。私は書類仕事とかの類が苦手なのだ。私は口を押さえながら頷いた。

そんな私を見て、二人は同時に、顔を見合させて手で口を押さえた。だけど堪え切れなかつたらしく、一人はそんなふうにしている私を見ながら、笑い始めた。

「ちょっと二人とも、そんなに笑わなくつたていいじゃない！ちょ  
うと！」

そう苦情をいつても、なんのそのつて感じで笑い続けた。一分ぐらいたつた頃に、笑い疲れたのか、一人とも笑わなくなつた。

「ちょっとーーー！ 人とも、ちょっとひどすぎるよー。」

むくれていた私に、一人ともちやんと謝罪した。」じじらへんが、玲一君や棗ちゃんとは違う、いい所だ。一人はそのまま調子に乗るんだけど。

「いやあ、『ごめん』『ごめん』。笑いすぎたよ。悪かった」「ごめんね。俺も確かに笑いすぎたよ。ホントに『ごめん』」「わかつてくれればいいよ。もつないようにしてほしいけどね。？？？ってあれ？」

私の体がまた傾いて意識が遠くなつた。今度は炎藤君が身体を支えてくれた。だけど、そこで注意された。

「まだ起きたばかりだから、身体が本調子じゃないんだ。とつとと寮に戻つて休むんだぞ」

「三剣は医学の知識も持つてるから、従つた方が良いよ」

「そつは言つけどぞ、私は炎藤君に訊きたい事があつたから、ここまで来たんだよ？」

それなのにさ、この扱いはひどくない？」

「それに関しては悪かつたつて。でも、俺は話せないんだ。仕方ないだろ？拓也、悪いんだけど高田さんを呼んでもらえるか？星川さんを女子寮に連れて行つてもらうからさ」

「あ、それなら私が携帯で呼ぶよ。そつちの方が早いでしょ？」

「まあ、出来るならそうしてもらつた方がいいんだけど????大丈夫なの？」

「大丈夫だつて。それぐらいならできるよ。心配しすぎ」

その後五分ぐらいで棗ちゃんが来てくれて、女子寮の私の部屋まで連れて行つてもらつた。その道中ですごく怒られたけど。  
なんとか部屋に入つたけど、あんまり痛みがきつかつたから、すぐにはベッドに倒れた。

眼を閉じるとすぐ意識は深い闇の中に落ちた。棗ちゃんが何か言つていたけど全然聞こえなかつた。いや、意識が落ちる直前に変な声が聞こえた。

『我が契約者はいつ楔が解けて、力に目覚めるのだろうか?』

あの声は一体何だつたんだろう?

## 教室での講じ（一）

あれから、一日後の教室の昼休み。クラスは特に、これといって何も変わらなかつた。

昨日小隊戦の発表があつたにもかかわらず、だ。まあ、重苦しい雰囲気になられても、困るんだけど。どっちなんだよ、と言われても仕方ないんだけど、そこそ楽しげな雰囲気ならいいな、と思つたぐらいなんだから仕方ない。うん。仕方ない。

「あんた、さつきから誰に向かつて喋つてんの？ちょっと意味分かんないわよ？」

棗ちゃんが話しかけてきた。誰？「うーん。誰に向かつてやつてんだろう？わかんないや。

「分かんないってそんなんでいいの？あんた」

むう、ま、いいじゃん。独り言だつたんだからさ。

「ま、いいけどさ。つていうかさ、私達の試合が初日のしかも初戦つてどうこうことよ。

緊張でつぶしたいのかしら？ねえ、どう思つ、鈴音？」

また、始まつた。棗ちゃんのちよつとした悪い所、それは理不尽な事があると、周りの人にはいちいち愚痴る所だ。今の周りの人つて言つるのは私の事なんだけど。

「ねえ、鈴音。訊いてる？」

「でもさ、棗ちゃん。大丈夫だつて。私達の本来の実力を發揮でき

れば勝てるつて

「ほう、それは聞き捨てならないな」

突然、隣の集団からナイフのような鋭い視線を持った生徒が出てきた。

このクラスでトップ級の成績の保持者である、日向櫂君ひゅうがかいだ。気づいたら、クラスの皆がこちらに注目していた。

「何か用？日向君」

「用も何も、僕は今の発言を撤回して欲しいだけさ。この△クラスで、学年代表のこの僕が団長を務める僕の小隊に勝てるだつて？？？？ふざけた事を言つのは止めてほしいな」

△クラスというのは、文字通り、△ランク級の素質を持つ生徒が、集められているクラスだ。つまり、このクラスでトップを取っているという事は、学年最強の地位にいることの証明になるんだ。

「はいはい。撤回するわ。これでいいんでしょ？」

「良い訳ないだろ。そんな明らかにふざけた態度で僕が満足するでも思つてんのか？」

そうだな。土下座でもしたら考へない事はないよ？」

このゲスがつ。彼の瞳の奥には明らかに侮蔑の念がともつていた。

「そんな事をする必要はないよ。星川さん

炎藤君が会話に入ってきた。ちょっと助かつた気がした。

「ん？君は確か？？？？？炎藤君だったかな？何か用かい？出来

れば、話の邪魔はしないで欲しいんだけどな。それとも、君が土下座でもしてくれるのかい？しかし、僕としては??????？」

「黙れ。それ以上、その醜い口を開くな。声を出すな。虫睡むしすが走る」

炎藤君の脅し文句は強烈だった。その声は低くて何もしていなく、ても切れそうなくらいに鋭かつた。その一言は日向君にとつても、予想外だったのか、固まっていた。クラスの皆も耳を疑っていた。光一君と玲一君は、はじっこで笑っていたが。

一番最初に動き出したのはさすがと言ひべきか、日向君だった。

「君、何を言つていいのか分かつているのか？それは、この僕に喧嘩を売つていてると判断するが????????良いかな？」

「別に構わないけど？そつだつたり、どうするつて言つんだ？」

「決まつてるじゃないか????????」ここで潰す

「いいけど、君じゃできないよ。君は????????いや、君程度じゃ俺に勝てない」

「それはどうかな！」

日向君は流れのような動作で制服の袖からナイフを取り出し、突きを繰り出した。その攻撃にも炎藤君は何でもないかのように対応していた。

「それが何か？」

「何つ！？」

あり得ない、といつよりとんでもない事が起きた。炎藤君は真剣白刃取りの要領でナイフを止め、そしてナイフをそのまま折ったのだ。

確かに、うちのクラスでも真剣白刃取りをできる人はいる。だけど、問題なのは捕まえたのが、人差し指と中指だったということだ

「これで、終わり? ジャア、これは正当防衛だぜ?」

炎藤君は、日向君の鳩尾に向かつて、コードクリューを三発ほどぶつけた。衝撃音が凄くてこっちがびっくりした。日向君の体が一瞬、空中に浮いた。日向君は受け身も取れず、転がつて噎せていた。

## 教室での講じ（2）

「へえ、これぐらいならまだ耐えられるんだ?????。なら、もう二、三発ほどぶち込んで、大丈夫だよな！」

さすがに、これ以上はまずいと思つたので炎藤君を止めた。

「え、炎藤君。さすがにもういいって。あと、かばってくれてありがとう」

「いや、一人が無事なら別にいいよ。っていうか、本当に大丈夫?」「大丈夫、大丈夫。怪我とかはないし、ね？棗ちゃん、大丈夫だよね」

「え？ああ、うん。助けてくれて、ありがとうございます」

そんな会話をしていると、クラスの皆が冷やかしてきた。

「ひゅ～、ひゅ～。暑いな。別の意味で」と言つてきたのはクラスメイトの紫藤浩一君。

「も～。こんな所でいちやいちやしないでよ」いつちは中井可奈ちゃん。

「鈴音、もう転入生君に手を出したの？お盛んなことで」いつちは越前青葉ちゃん。

顔を真っ赤になつた私を見て、冷やかしささらヒートアップした。

「もう一・皆、いい加減にして！炎藤君も何とか言つてよ」

そう私が言つと、炎藤君は少し黙つて考え始めた。そしてこう答

えた。

「うーん。じゃ、コメントは控えさせていただきます」

そう炎藤君が言つとクラスの皆、笑い始めた。いつものクラスの空気が戻ってきた。

「ふざけるな！こんな奴に、僕が負ける筈がないんだ。これでも喰らえ！」

みると日向君が天陣を構築していた。皆が構えた。炎藤君は苛立ちで顔がゆがんでいた。そして日向君の方に走り始めた。

「そんなんすさんな術式で、俺を倒せるわけねえだろ？が！なめるなよ！」

炎藤君は天陣に手を突っ込み、構築陣を解除し始めた。玲一君が炎藤君を止めようと呼びかけていた。

「無茶だ！やめろ、炎藤！お前、死にたいのか！？」

そんな玲一君を止める人がいた。

光一君だ。

「落ち着きなよ。玲一、大丈夫だつて。彼は」

「何が大丈夫なんだよ！？光一、お前だつて知つてるだろ？たとえ天陣に介入しても、完全に術式を解かない限り、発動しちまうんだぞ。低級の術式を解くのにも、俺達は難儀していただぐらいだつたじやねえか！それぐらい、お前だつて覚えてるだろ！？」

「分かつてるよ。でもね、玲一。あれは無言詠唱式の術式だ。無言詠唱式の術式は、詠唱式の術式に比べて、威力が格段に落ちるんだ。

だから、当たつても大した威力はない。

多分、俺らの練習用の術式ぐらいの威力しかないんじゃないかな？

それに、ほら、もう終わるみたいだし。見てみなよ

光一君の専門的な説明に聞き入つて忘れてたよ。皆の視線が一人の方に向いた。日向君の術式は、完全に消されていた。

炎藤君は解いた瞬間に、日向君の鳩尾に強烈なボディーブローをくらわした。

「はあ、はあ。そんな馬鹿な！何故、いつも簡単に術式を消す事が出来るんだ？俺でも、まともに成功した事ないのに！」

「それは自惚れだよ。イタリア本部に行つてみろよ。あんたぐらいの実力を持つてる奴なんかいくらでもいる。その程度であまり調子に乗らない事だね。まだ学生で、しかもこんだけの実力あるから褒められてるだけ。

確かにあんたは努力すれば強いよ。だけどあんた、騎つてばっかでまともに努力してないだろ。今のあんたに必要なのは、ちゃんと修練することだね」

ある意味、つていうかすんごい言いたい放題だつた。だが、炎藤君の先ほどの実力を見れば、皆が納得していた。

「くつーまさか、だからか？だから、親父は褒めてくれなかつたのか？」

「さあな。俺にとつてはどうでもいいことだよ。でもな、あんたがもし、親父さんに認めて貰う為だけに、戦つて来たつて言つんなら。あんたはもう戦うな。そんな半端な覚悟で、戦場に出てくるな。はつきり言つて、迷惑だ。あんたみたいなタイプは、戦場に出ても味方を混乱させるだけだからな」

キーン、コーン、カーン、コーン。ちょいびとへ、昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

「はい、皆。昼休みは終わつたぜ。次の授業の準備を始めようよ」

炎藤君は、上手く皆の気をそらして、席に座らせた。

## その後の教室

その五分後、授業にやつて来た風間先生が、びっくりしていた。なんとかつて言つと、教壇に折れたナイフが刺さつていたからだ。炎藤君の顔を見ると、凄まじい量の冷や汗を流していた。修練の時は、一滴たりとも流していなかつたのに。

炎藤君と私と棗ちゃんで、風間先生に事情説明をして、なんとか事なきを得た。

「ふむ。じゃあ、こいつ事か？星川と高田の会話に日向が絡んできて、それで、炎藤は星川と高田をかばつた、と何か間違つてたか？」

「いえ、先生。それであつてます

「先生、ちょっと待つて下さい」

先生を呼び止めたのは、日向君だった。なにか、言いたい事でもあるんだろうか？

「ん？何だ、日向。何か、言いたい事があるのか？」

「はい。僕は彼に向かつて、天術を使用しました。その点も踏まえて厳正な処罰を下してください。以上です」

その発言を訊いた先生は眉をひそめて炎藤君に訊いた。学園内では修練場などの例外を除いて、天術の使用は固く禁じられているからだ。

「それは本當か？炎藤」

その時私は、はつきり言つて?????驚いた。わざわざ、しか

も、自分が不利になるような事を、言つとは思わなかつた。後で、その事を炎藤君に訊いてみると彼は、こう答えた。

「ああ、あれ？彼はさ、あれで結構プライドが高いんだと思つ。俺の知り合いにさ、貴族の人がいるんだけど、その知り合いがこいつ言つてた。

「本当にフライドがある人間って誰つのは、まず自分の経歴を自慢しない。次に、己の非は否定しちゃいけない。その状態から前と同じ？？？？？或いは、それ以上の信頼を得るには、めちゃくちゃ努力しなきやいけないだろ？そして、そんな努力が出来る奴は本当の貴族なんだ』ってな。つまり、彼の家系は結構な御家柄ってことさ。そして、その家に恥じない活躍をしよう。そう思つたから、彼はあんな事をしたんだと思うよ？」と言つていた。

それはともかく、炎藤君はこう答えた。

「はい。彼は確かに天術を使いました。しかし

お仕事

「必死？どういう意味だ？」

「先生、突然現れた人間に今の場所を奪われた? ?? ?? ?? ?? ?? します?」

「それでも?????奪い返せなかつたら、どうします?天術の件に關しては、何も考えられなくなつて、取つてしまつた行動だつたと思うんです」

「つまり、お前は何が言いたいんだ?」

「要するに俺が言いたいのは、天術の件は、見逃してくれませんか？」  
？という事です」

「ふざけるなー。」

「ふざけんだのは田向君だった。」

「ふざけるなよー！俺の覚悟を汚すなー！ありのままの俺に罰を受けて  
せろー。そりじゃなきや意味が無いんだー。」

「黙れよ。誰が、ただでお前を許してやってくださいって言った？  
黙つてそこで座つて訊いてる。先生、今度の小隊戦であいつの小隊  
が俺達の小隊に勝つたら天術の件はなしで、俺んとの小隊に負け  
たら？？？？？？？？？うですね罰をー・五倍ぐらいくしてぐだわー。  
こんななんどどうしよう？」

「どうでしょ？？？？？？？？まあ、それでいいなら、俺は別に  
構わんが」

「別にいいよな。エリート君」

「望むところだ！絶対に倒してやる」

「ふつ。その調子で頑張れ。では、先生。授業をどうぞ」

「あ、ああ。じゃ、授業を始めるわ。全員教科書百七十四ページを開け」

その場はそれで治まり、いつも通りの授業が始まった。そして、  
放課後に炎藤君と田向君は、決闘書にサインを書いて正式な決闘となつた。

私はその間に、模擬戦闘用の武器使用の許可申請書を提出した。まあ内容は名前の通り。模擬戦用の武器の使用許可を貰う事だ。拳銃は弾がゴム弾。打撃武器などは、叩きつけても相手がケガしないように、柔らかくなっている。

『』に関しては矢が当たつても大丈夫なように、矢の先が衝撃吸収材で包まれている。

まあ、確かに怪我はしない。だけど、どれも当たつたら、実戦では負傷する。それを実感させるために、特殊な戦闘服を着るようには指定されている。

そして、その服はダメージが致死量に至ると、特殊な振動を、着用者に与える。この特殊な振動は、自分は死亡したんだぞ、と伝えるための物なんだ。

炎藤君や、皆の分の申請も済ませたころに、炎藤君が武器の運ぶのを手伝ってくれた。

「あ、星川さん。手伝いますよ」

「炎藤君。助かるよ。私達のチーム合計で六人でしょ？ もう運ぶのどうしようって、考えてたところなんだ。あ、助かった」

その道中に、いくつか彼に質問した。さつきの質問もその時にしたんだ。

「ねえ、炎藤君。ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「はい？ なんですか、星川さん。何でも訊いてくれて構いませんよ」「なんで模擬武器の申請書なんて出させたの？」

「ああ、その事ですか。それはですね、皆の獲物を使った上での実

力を知りたかつたからなんですよ」

「へつ？ 何で？」

「何でつて、そうですね。試合の予定日が、予想よりも早かつたらですね。俺の予想だと、もう一、二日余裕があれば、もうちょっと後でもよかつたんですが？？？？？まあ、結局、いつかやることになつてたんですけどね」

「いや、そうじやなくて。個人で自分の得意な武器を言えばいいんじゃないの？ って話」

「ああ、そういうことですか。実力が分かんないと、基本的なフォームーションとか、組む事が出来無いじゃないですか」

「え？ そういうのって、炎藤君が考えてくれるの？」

「ええ、そのつもりだつたんですけど????要りませんか？おせつかいでした？」

「ううん。そんなことないよ。いやあ、私が考える物とばかり思つてたからさ」

炎藤君は軽く笑いながら答えた。

「ははは、そんなことはしませんよ。星川さんにやつてもらうのは実戦、と言つよりも試合の時の指揮。フォーメーションとかは、さすがにこっちで考えますよ。あ、でもたまに、相談したりすることもあるでしようから、その時は頼みますね」

「うん、わかった。あと、ついた。炎藤君、運ぶの手伝ってくれて、ありがとうね」

「いえいえ、どういたしまして。別に気にする必要はないよ、星川さん」

「そういえば、わざわざ前で呼んでよ。それと、敬語なんか使う必要ないから」

「うん。わかった。じゃあ、鈴音つて呼ばせてもらひつよ。とにかく皆どこだろ？」

「止めるの早!まあ、いいや。あそこみたいだよ。行く!」

ある一画で、皆それぞれ喋ったり、体操したりしていた。皆口つちに気づいて手を振っていた。

「ありがとう、鈴音。ところでさ、一人ともまた一緒になんだね。あれ、ずっとこけてどうしたの? 鈴音なんかあつた?」

「今の発言のせいだよ! つていうか、怪しい所なんて、何にもないんだから! はい、弓と矢!」

「もう、そんなに怒らないでよ。ちょっとしたジョークじゃないね?」

そんな事を言う人がいけないんだよ。と棗ちゃんに注意した後、私と炎藤君で武器を渡していった。

ちなみに、私は拳銃。炎藤君と狩野君は刀。光一君は剣。玲一君は槍。棗ちゃんは『』。

## 自分達の一つ名

「鈴音。あなたの銃、名前なんて言いつの？」

「えつ? どの銃の事?」

「どの銃つて????? 鈴音。あんた、何丁銃持つてきたの?」

「えつ？えーと、六丁ぐらいかな」

なぜか、皆素つ頓狂な声をあげていた。どうでもいいけど、素つ頓狂つて何か言いにくくない?ほんとにどうでもいいんだけど。

「鈴音？その拳銃、六丁？見せて貰つても良い？」

まず手に持っていた二丁を持つてもらつてから、太腿のホルスターにひつかけていた二丁と制服の裏に作つたポケットに入れていた二丁を見せた。

「鈴音、ひょっとしてこれ、いつも持つてたの？」

いもは教室の口さかにとお寮の自分の部屋にあるんだ

「ちつなんだ。ちなみに、それぞれ名前を訊いても良い?」

「うん、別にいいよ。棗ちゃんが持つてた銃の名前は、ヴァルス

この拳銃には光一君が食いついた。

「へえ、この銃自分で作つたんですか。すういですね」

「えーと、話し続けていいかな?」

だけど、ちょっと食いつき過ぎだと思つ。す、」いまじまじと見ていた。

「ああ、ごめん。自作の拳銃つて、初めて見たものですから。ありがとう。はい」

「どういたしまして。じゃ、次はポケットから出したこの銃。FN-F.I.Ve-S.E.Ven。この銃は、世界でも結構小さい方の拳銃なんだけど、貫通力は結構ある拳銃なんだ。といつても威力に関してもサブマシンガンのプロジェクト90の方が上なんだけどね」

炎藤君以外はへえ、そなんだ。とか呟いていた。炎藤君は、準備運動輪しながら皆のつぶやきを訊いて微笑を浮かべていた。

「じゃあ、最後にこの銃だけ。この銃はベレッタM92FS。アメリカの警察で使われている拳銃。まあ、メジャーな銃つてやつだね。これで拳銃の説明は終わり。他に訊きたい事はある?」

「ねえ、鈴音。銃の装填出来る弾数は?」

「えーと、ヴァルスは火力の量次第。ファイブセブンは二十発。ベレッタは十五発ってところかな」

「へえ、そんなに入るんだ」

それを訊いた玲一君が、爆弾発言をしてくれた。

「やっぱ、銃の巫女の称号は伊達じゃないんだな」

サラッと人の二つの名を明かすんだから玲一君には困ったものだ。

「ちよつ、玲一君ーそなん」と、今言つ必要ないからー」

当然、炎藤君が首を傾げながら、不思議そつな顔をしていた。

(こんな風なリアクションをされるだろうな、と思つたから言わないとおいたのに! もう、なんて事してくれんのよー)

言葉を込めて、玲一君を睨みつけた。言いたい事は伝わったが、意味がなかつた。

「いや～、悪い。てつきり、もつといたもんだと思つてたからね。

あははは

「あははは、じゃなによー全くー」

「あのや、結局、銃の巫女つてどうこいつ事?」

炎藤君が置いて行かれなじようにすぐさま訊いて来た。私が慌てるど、棗ちゃんが説明を始めた。棗ちゃん、頼むから話さないで! そんな私の希望を無視して棗ちゃんは話し始めた。

「実習つて、それぞれの専門武器の学科に行くじゃん。鈴音はさ、普通は一つの学科を取る所を拳銃学科、狙撃銃学科、機関銃学科、散弾銃学科とか、まあうちの学校にある、全部の銃系統の学科を取つてるのよ。全部で八つぐらいかな?

しかも、その全部の学科成績で一番を取つてるの。筆記でも技術でもね。それで付いた称号が

「銃の巫女、と言つ詰ですね。なるほど、納得。??????  
でも、全ての学科で一番ですか。凄いを通り越して、恐ろしいです  
ね

「へへへ、そうだろ。俺も初めて訊いた時は、さすがに驚いたけど  
な

「これにはさすがに文句の意味も含めてお返しをしてあげた。

「玲一君が誇る事じやないじゃん。自分だつて星刃・槍帝セクト レギンスつて呼ば

れてるんだから、似たような感じじゃん。それに自分の事じやなくして、人の事を誇つてどうすんの」

「星刃・槍帝セクト レギンス? 何それ、どうこいつ事?」

炎藤君はこの事に關しても、不思議そつにしていた。

「それがさ、実は玲一君つてね。槍術の業界じや、超が付くほどの有名人なんだつて」

「へえ、何でそんなに有名人なの?」

「玲一君つて、槍術の世界大会で優勝した事があるんだつて。しかも最年少の年齢で」

「ふーん。ちなみに、何歳のころに取つたんだ?」

「何歳だつだけ? 玲一君」

玲一君はため息交じりに説明してくれた。いい氣味だよ、ほんと。

「は〜、あんまり言いたくないんだけどな。十歳の頃だよ。しかも三年連続で取つたから、余計にな。それに俺はその大会の最後の優勝者だからな」

「最後の優勝者? どうこいつ意味? 言いにくい事だつたら、別に言わなくてても良いぜ」

「別に構わねえよ。何でかつて言うとな。大会が行われて、表彰式が終わつた直後に、悪魔が急襲してきたんだよ。その日に主催者や大会参加者の多くが死んだよ。俺は?????いや、俺の槍術は実戦向けの技術だつたからな。

その技術で客だけは、何とかシェルターに逃がす事は出来たんだ。その後にな不意打ちで魔術の一発が、肩に当たつてよ。そいつは何とか倒したんだけどよ。気付いたら囮まれちまつててな。魔術の衝撃で肩に力が入らなくつてよ。

そこで思つたんだよ。俺ここで死んじまうのかな？ってな。でも、次の瞬間だよ。悪魔達がな、虹みたいな光に撃たれてな、次々と倒れていったんだよ。当時はよく解んなかつたんだけど、その光は天術の光属性を色んな属性でコーティングした技らしい。

でだ、その後中年ぐらいのおつさんが出て来てよ。『よく頑張つたな。君のお蔭で観客は助かつた』とかいってな、俺を医療現場に連れてつてくれたんだ。

後で俺を治療してた人に訊いたんだけどな。その光を出せるのは、その人とその人の弟子だけらしい。まあ、俺の命の恩人だよ。それは置いといて、主催者が死んじまつたからな、もうやらないってことになつたんだ

「悪い、坂田君。それ、俺の師匠だわ」  
「はあ？ どういうことだよ？」

唐突過ぎて、話が理解できなかつた。何？ どういう事？ 炎藤君はこちりに手を出して、次の瞬間、掌一杯に虹色の光が溢れて來た。

「綺麗だね。どうやつたら、こんな風に出来るようになるの？」

「悪い。これは話す訳にはいかないんだ。で、こんな光だろ？ 君が見た光つて」

「ああ。確かにこんな光だつた。お前の師匠つてどこにいるんだ？ できれば、お礼が言いたいんだが」

「うーん、どうだろ。イタリアで俺の養つてる子供達に、天術を教えて貰つてはいるからな。今度、イタリアに行つた時に伝えとくよ」

「ああ、わかつた。頼んだぜ？」

「ああ。任せとけつて。で、篠月さんは何かないの？ そういう称号とか」

「ん？ あるわよ。聖光の（・）弓<sup>エクスペント</sup>使い（エクスペント）って称号なんだけど。何でそんな名前なのか、私つて光系統の術式が得意なのよ。矢にも光属性をエンチャントするしね。しかも、私つて特異な

体質で光属性の術式を使うと、聖属性?????つまり、七大属性ではない属性が混入するんだって。あ、ちなみに弓も大抵は百発百中なのよね、私。これはどうでもいいかな？」

そりゃと自慢するけど、棗ちゃんは確かに凄い人だ。自分で自分の事を自慢するぐらいの実力は、本當にある人なのだ。

「ふーむ。そつか、何気にこのチームつて、全員が称号持ちなんだ」

『称号持ち』？？？？それは一学年、一百人近くいる中で選ばれた、エリートなエクソシストの事を言つ。この学校では、大体一学年三十人近くが『称号持ち』に認定される。

その二十人は各クラスに分けられる。二十人の中でも特に優秀な人がSクラスに入る。ちなみに、狩野君も称号持ちだけど、ぎりぎりでクラスに入りきらなかつた。彼とあと一人はAクラスに在籍している。

狩野君の称号は聖劍セイケイ(・)劍皇レクサス。聖劍を製生する事が出来る異能を持つてゐるから、本部で与えられた称号であるという事らしい。らしいと言つのは、彼の異能を誰も一回たりとも見た事はないのが。

だから聖剣を見られるのかと、けつこう楽しみにしていたなんだけど。今回の模擬戦では、模擬武装を使うようだ。本当に残念だ。うん。

「それじゃ、模擬武装を使つた修練を始めるよ。皆、それぞれ自分の武器を持つて、適当に配置について。それじゃ、今回の修練では四対一だから、一の方は俺と光一。四の方は残りのメンバーね。編成は皆で決めてくれ。攻め方は自由だから。俺達が降参したら、合格。そこで模擬戦は終了。ルールはそんなもんかな。じゃ、頑張れ」

「じゃあ、そういう事みたいだから、頑張ってね」

聖龍騎士団の師団長一人に『称号持ち』とはいえ、一般的の生徒が敵う筈がない。だけど、やらなきやいけない。将来、自分よりも強い悪魔に遭遇しないとは限らないんだ。力は有つた方が良いに決まつてゐる。私には、やらなきゃいけない事があるんだから。そのた

めに、私は強くなると決めたんだ。

「それじゃ、作戦決めよつか。どうしたら良いと思つ?」  
「いい案、つてあいつらに勝てると思つのか? 聖龍騎士団の師団  
長が一人だと? 難しそうだ!」

「だつてさ、やるからには勝ちたいじゃん。一%でも勝てる可能性  
があるのなら、それに掛けたい。だつてさ、同じぐらいの実力を持  
った悪魔と戦うかもしれないじゃん? それなら、私は強くありたい  
と思つから。皆はどう?」

皆、眼を見開いて啞然としていた。あれ? あたし、そんな変な事  
言つたつけ?

「鈴音????? あんた言つ時は言つのにね。いやあ、凄いわ。私  
は協力するわ。私の役割って後方支援ぐらいしかないけど」

「うん。今のは驚いたよ。師匠と同じぐらいの実力を持つ悪魔か。  
考えた事も無かつたけど、確かにその通りだね。よし、頑張るとし  
ようかな」

「そうか、確かにそうだな。あいつらとのあまりの戦力差で忘れて  
たな。そうだな、生きるのを諦めない。これは重要だよな。よし、  
いつも頑張るとするか」

「どうやら、協力は得られたようだ。さて、それじゃフォーメーシ  
ョンを決めるとしてよ。」

「どうやら、何とか話はまとめたみたいだな。

「どうやら話はまとめたみたいですね。そうだ。炎真、訊きたい事があるんですけど、いいですか？」

訊きたい事?」<sup>1</sup> にしては珍しいな。

拓也は基本的に、自分で調べられる事は自分で調べる、どうしても解らない事は、他人に質問するつて言う行動力に溢れた奴だ。今の地位で解らない事はそうないはずなのに、一体何の事が分からんの?

「何だ? 質問次第では答えてやらんでもないが?」「星川さんとどういう関係なんですか?」

「ツ! そうきたか、ちょっと予想外だな。

俺が黙っていると拓やは立て続けに喋り続けた。追い詰めなければ俺は話さないと思つたからだつ。まあ、そのつもりだったけど。

「あなたの鎖の(・)十字架<sup>カーテナ クローチエ</sup>は、対象が少なくとも、十メートル圏内にいないと発動しないでしょ? でも、あなたが彼女の近くに居たとは思えない。教えて下さいよ。炎真!」

「そう怒鳴るな。教えてやるよ。あいつ……鈴音はな。先代『闇』の実の妹なんだ。

なあ、拓也。何で『闇』????? 絶無の暗黒龍は出てこないと思つ?」

「え? そりや、媒体となる指輪が出てこないからじゃないんですか?」

やつぱこいつもそつ思つてんのか。

俺はポケットから、漆黒の指輪を取り出した。『闇』との契約時に使う指輪だ。拓也は眼を見開いて驚いていた。そして、珍しく掴みかかってきた

「なつ！なんであんたがそれを持つてんだ！」

「落ち着け、拓也。焦つても何もならんぞ」

「これが、落ち着いていられるか！あんた、一体どうこうつもりなんだ！？」

俺は拓也の胸倉を掴み返して黙らせた。

「落ち着けって言つてんだる。落ち着いて指輪を確認してみる」

拓也の胸倉から手を放し指輪を渡した。今度は指輪を見たとき以上に、驚いていた。

「龍の力が????宿つてない？炎真、これはどうこうことなんですか？」

「気づけって、『セイブルズ継承』だよ。先代の闇の龍王は死ぬ寸前にな、龍帝の力を実の妹である鈴音に『継承』させた。だから、その指輪には龍の力が宿つていらないんだ」

『継承』

それは聖龍騎士団の団長が、死ぬ間際にその龍の力を周りにいる者に継承されることから付いた名前だ。だが、継承できる可能性を持つ者は少ない。

「でも『継承』の条件に、上手く合致するかは分からぬでしょ？だつて、『継承』した者を認めるかどうかは、結局、龍王のさじ

加減一つなんですか？

「そう、やはり最終的な決定権は龍王にあるのだ。しかも『継承』で認めて貰うのは、儀式を行って認めて貰うよりも、十倍以上難しい。だから鈴音が『継承』できたのは、まつ毛が三つも奇跡に近い事なんだ。」

「それに、それなら彼女は龍の力に用覚めないと、おかしいじゃないですか。」

それに、彼女は『継承』の記憶がないんでしょう？ それもおかしいし、あ～もう、よく解んなくなってきた！ それで、結局どういう事なんですか？」

「はあ、どうしてこいつはそこまで解ってるのに、結論に行きつかないのかな。しょうがないので結論を話した。」

「簡単な事だ。あいつの記憶に俺が封印の楔を打ち込んだからだよ。力の継承はその継承した者の記憶を媒介にするからだ。だから記憶を封印されている今、あいつは力を使う事は出来ないのさ。これで質問は終わりか？」

「待つてください炎真。今のでもう一つ始めた。何で記憶を封じたんです？」

「…………お前、それは本気で訊いてんのか？」

「…………」

その声は自分が思っていた以上に低く、鋭かつた。だけど構うものか。そう思つてしまつぐらいい、俺は怒つていた。気付くと、拓也の胸倉を掴んでいた。

「なあ、拓也。あいつが継承した時、あいつが何歳だったと思つてんだ？まだ、十歳だつたんだぞ！小学生もいいとこじやねえか。俺はそのころにはもう戦い始めてたからな、別に構いやしねえよ。だけどな、あいつはただの一般人で、今まで戦いなんて物からは最も縁がない存在だつたんだ。それでもお前は力を持つてるから戦えつて言うのか？」

年端もいかぬ子供に、それでも戦えつて言うのか？お前は！しかも、あいつが最初に見た死人が誰だかわかつてんのか？自分の姉なんだぞ！そんな奴に向かつて、お前は戦えつて言うのか！？答えて見せろよ！あいつを一番近くで見てきた俺に向かつて、そんなセリフを吐けるのならなつ！」

しだいに語尾が強くなつていった。そうか。俺にとつても、まだ納得のできない問題なんだな。これは。見えてみると、拓也がへこたれていた。

「悪かつたな。お前のせいでもないのに、愚痴つちまつて。まあ、元気出せよ。俺、いや俺達がしなくちゃいけないのは、いつか目覚めるだらうあいつや、他の皆をサポートする事なんだから」

「そうですね。まずは、目の前の事に対処するとしまじょうか」

「ああ。その息だ。頑張れよ」

「おーい、二人とももういいよ。そろそろ始めようよ～」

「おつと、むこうも終わつたみたいだな。ちょうど良かつたじゃねえか」

「あ、そうだ。今思つたんですけど、彼女の楔つて解けるんですか？」

「ああ。……先代『闇』からな、そういう風にしておいてつて頼まれたんだ。多分、あと一、二年もしない内に解けちまつと思つ。自分の死の悲しみに打ち勝てるぐらいの年齢になるまで、記憶は封印

しておいてつて頼まれたからな。わ、田の前の事に集中しろよ。多分、あいつらは一筋縄じやいかないからな」「ええ。そうみたいですね。眼が違いますからね。わざとは段違いに」

あの眼は勝てると確信してる。さてはて、どんな策を練つてきたのや、楽しみだな。

## 部隊内の模擬戦（1）

「うちの策が練り終えて、一人を呼んだ。これでもかといつぐら  
いに策は練つた。これで一撃も当たらなければ、もはや絶望的と言  
つていいぐらいに。」

「おう。じゃあ、早速始めようか。そつちの準備はいいか？」

「皆、いけるよね？？？？？？うん。大丈夫だよ」

「そうか。じゃあハンデとして、そつちに先攻は譲るわ。こんだけ  
したんだから、ちゃんと俺らに攻撃を当てるべよ？」

「そんなの当たり前じゃん。?????じゃ、いくよ」

ガウンッ！ガウンッ！

戦いの火ぶたを切つたのは、私のヴァルス・ヘルブスの二丁だ。  
私がこの銃を使つているのにも、ちゃんとした理由がある。天力を  
込める事で方向を自由に操れる拳銃なのである。しかも威力も天力  
を込めた量で変化するし、薬莢やっきょうで属性も変わる。最初に左右から弾  
丸を飛ばした。

私の勘だと、おそらくこの弾丸は弾かれる。

ギィイイイインッ！

ギィイイイインッ！

やつぱり！私達の策だと、次は????????秦ちゃんの天術を工  
ンチャントした術矢が、二人に降り注ぐ！

ドレドドレドドレッ！

良し！これならどうだろう。だが、砂煙が晴れた時に見えた二人  
は無傷だった。後で訊いてみると、一人は風の術式で全ての矢を受

け流していたらしい。

「ふう、いやはや驚いたね。矢の一本や一本、飛んできた所で大丈夫と思つてたけど、まさか十七本も飛んでくるとは思わなかつたね」「こちらとしては、無傷でいられる方が信じられないんだけど…しかも数まで把握してゐるし！」

「じめんね。でも、ルールに天術を使っちゃダメとはないし。それと、これで終わり？」

それならもう行くけど、良いよね？」

「いい訳ねえだろ」「

そう言つたのは、狩野君と玲一君だつた。はつきり言つと、私達の攻撃はあの二人を近づかせるための、時間稼ぎにすぎない。だけど、炎藤君と光一君は両方近接タイプ。どっちかって言つとこっちの方が不利。そのために、私達は罠を仕掛けたんだ。

パアアアアアアアッ！

地面に刺さつた矢が発光し始めた。そう。矢にはエンチャントがして有つたんだ。

そしてエンチャントしてたのは、あらゆる物を捕縛する聖光の術式だつたんだ。

「ほう、驚きだな。攻撃系だと思つていたら、捕縛系だつたんだな。まさか、戦闘中に一度も驚かされるとはな。だけどな、この程度の術式でそんなに捕縛できる訳ないだろ…」

ブツツ！一瞬で炎藤君が網を切り裂いた。同時に光一君は剣を

一閃させた。

途端に二人を模つていた水の術式で作られた幻影は消えた。

「光一、右斜め後ろにがいるぞ！坂田よ！氣配の殺し方は上手いけどなー！その程度の氣配の殺し方じゃ、俺達にはばればれだぜ！」

炎藤君は左側に、光一君は右側に刀を一閃した。

「まだまだっ！」

ズガガンッ！ズガガンッ！

ベレッタとFIVE SEVENを交互に撃つて、二人を援護した。

「はっ、中々のチームワークだけどなー！まだまだ甘いぜ！光一、跳べ！」

光一君が跳躍姿勢を取った瞬間に、棗ちゃんは矢を放った。二発連続で。だけど、光一君は矢を弾き、跳躍した。炎藤君は手を上げて、風の術を地面に叩きつけようとした。

「させる訳ねえだろ！烈塊双迅流、塊重撃！」

玲一君は、見るからに重い一撃を炎藤君に向かつて放つた。炎藤君はその一撃を体捌きだけで、かわして見せた。かわされた一撃は地面に当たった。それだけで小規模なクレーターが出来た。

そのせいで体勢が崩された炎藤君は技を放ち損ねたように見えた。だけど、彼は瞬時に術式を作り替えた。その術式は、同じ風の術だった。

「光一！眼を閉じてろ、眩しいぜ！」

「皆、眼を閉じて！一人ともこいつに一回退避して！」

「もう、遅い！」

竜巻のような烈風を天陣越しに感じた。眼を開けると、玲一君の服が裂けていた。この服はどんな術を受けても大丈夫なように特殊な素材でできているのに、何で？

「ぐあ、痛つてえ！うわ、なんじゃこりや！」

「種明かしするとな。これはな、ただの風じゃねえ。これは、風と水の術式を組み合わせたかまいたちみたいなもんだよ」

「へえ、そうなんだ。それでも、何とか一人だけは守れたよ。危なかつた」

天術の障壁を強化して何とか、私と棗ちゃんと狩野君は風から守る事が出来た。光一君が着地してきた。私達の方を向いた途端に驚いていた。

「あれ？なんで、三剣の烈空を受けて無事なの、君達？いくらその距離で障壁を張つてたとしても、今まで三剣の攻撃を防ぎきった人はいないのに」

「決まってるだろ。その分、込めた天力が半端じゃなってことだよ。しかし面白いな。まさか俺に合成天術レギュルスを使わせるとはね。もうすでに合格級の結果を出してるんだけど、でもルールには従わないとな。俺らのどっちかに一撃でも当てる。そうすりや君達は、上級悪魔クラスに匹敵する実力を持つてる、ってことになる。学生の段階でそんだけできりや、君達は最強だよ。さあ、来な！」

「言われなくても、そのつもりだよ。皆、頼みがあるんだ」

「何？そんな前置きしなくたって聞くわよ。あんたの策に私達は従

うだけなんだから。

それで、私達は何をすればいいの？」

「時間を稼いでほしーの。これから発動させる術式は凄い集中しなくちゃいけないから、その間私は何もすることが出来ない。その間に私をサポートして」

「了解。それじゃ、玲一君、木場君。私が先制で攻撃するから、その間に一人に近づいてなんとか攻撃して。鈴音、術式を組み合わせる事が出来たら、私の肩を叩いて」

棗ちゃんはこういう土壇場の時に、てきぱきと指示を出してくれる。彼女がいてくれてありがたいと思うのは、こういう時だ。

## 部隊内の模擬戦（2）

「じゃ、始めるよ。準備はいい？」

「「もしかた」」

ヒュンッ…ヒュンッ…

「速いな。しかも命中力も申し分が無い。これなら本部でも認めて貢えるだらうね。でも、俺らが相手じゃ無駄さ！」

そう言つて刀で矢を弾いた。その瞬間、矢が強烈な光を放つた。光は何も、攻撃や回復しか手段がない訳じやない。強烈な光は、それだけで田くらましになるんだ。

「おわ、危なっ。びっくりした。まさか田くらまし使ってくるとはな」

「だからどうした？俺たちだってこんな田くらましが効くとは思つちゃいないんだよ」

「どつちにせよ、時間稼ぎが目的なんだろ？それじゃ、やる」とは変わらないんだよな。術技、十死剣・千手」

刀が千本程ではないにせよ、そう例えられる位に増えていた。

そして一閃させた（・・・）ように見えた。でも、玲一君が言つには、炎藤君は十回も攻撃したらしい。坂田君は何とか見切つて槍で防いだり、かわしたりして何とか耐えきつた。

「ほう。一発も当たらないとは凄いな。さて、それじゃ次はどうかな」

「まだ、あんのかよー」いつも行くぜ。奥義、四迅六道巡り！」

玲一君は四人位に分身して、それぞれが六回攻撃していた。つまり、合計で二十四回攻撃した事になる。でも炎藤君は、その攻撃を、しかも全部体捌きだけでかわしてしまった。

「んだけ体柔らかいのよ？？？？」

光一君と狩野君の戦いは、もう凄まじいの一言に限る。

確かに、炎藤君と玲一君の戦いも凄いんだけど、あつちは何と言ふか剛々柔って感じだったんだけど、こつちは完全に柔々柔。

剣戟の全てを体捌きでかわしていた。

「うわ、危なッ。やっぱ光龍王様とは実力が違ひ過ぎますね。速すぎ」

「そりかな？そんな事はないと思つんだけど。君の剣戟もひやりとするような時があるし。

ただ経験と、修練の長さの違いだと思つんだけど」

「実戦じゃそんなのいい訳にしかなりません。修練が少なかつたせいで死んじやつた、とか言つてもしょうがないですしね。『いつ死んでしまうか分からぬから、人は頑張る事が出来るんだ』さつき、作戦立てる前に隊長が言つたセリフです」

「へえ、星川さんも良い事言うじやん。まだ実戦経験が乏しい人の言葉だとは、とうてい思えないね。ま、炎藤は贊同しそうなセリフだけどね」

「そうですね。ひとつもお喋りだけしてゐる訳にはいきませんから。行きますよ、光龍皇様」「来なよ、世界最強の騎士の弟子よ」

次の瞬間には、一人とも剣と刀をぶつけあつていた。

「ふう、なんとかできた。棗ちゃん、お願ひ！」

「わかつた！一人とも、下がつて！」

ヒュンッ！ヒュンッ！

炎藤君と光一君に牽制の矢を放つた。一人とも、体捌きだけでその矢をかわした。その間に、玲一君と狩野君はこちら側に走ってきた。

「其は全てを飲み込む闇

あらゆる物を飲み込む力のもと

我にその力の一片を与えたまえ

『始まり（ペイル）の（・）闇<sup>ゼロ</sup>』

良し！なんとか成功！三段文言、これ思つた以上に難しかつた。皆、驚いた顔をしながらこっちは見ていた。

「鈴音、あんた????????三段文言の天術が使えたの？」

「はあ、はあ？？？。ううん、今までには使えなかつたよ。ただ、昔そういう類の本を図書室で見かけたのを思い出しから、昨日借りに行つたの。朝、棗ちゃんと別れた後にね」

「まさか用事つてそれだつたの？しかし、あんた天才なのが努力家なのか解なんないけど、凄すぎるわよ。つていうか、もう凄いを通り越して恐ろしいぐらいね」

二の方を見ると、頭上から全てを喰らい尽くす闇属性の光が降り注いでいた。

「光一、ちょっと力を貸せ！これは、ちょっとキツイ。なんてパワードよ、これ！」

「解りました。じゃあ、いきますよ」

炎藤君は自分の頭上に障壁を張つてガードしていた。光一君は炎藤君の肩を持つて彼に天力を送つていた。そして、数十秒後、闇の光は消えた。

そのあと、二人は地面に倒れこんだ。そこで炎藤君が降参、と言つてきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1746z/>

---

虹の祓魔師

2011年12月31日22時47分発行